

バシコーワ 三里廿七丁
サギボーワ 四里三十二丁
カサーツキナ 七里九丁
ミハイローフスカヤ 八里十四丁

クリユチー 六里廿七丁
ギリチン 六里七丁
アジヨルキ 六里廿五丁
プラゴエシチエンスク 六里廿七丁

コルザゴフ 四里 强
シモノーワ 七里九丁
クマイルスカヤナ 五里十四丁
(電信局所在地)
アレクサンドロフカ 六里廿三丁

インノケンチエフカナ 四里二十五丁

(自哈巴羅府約二百十四里廿八丁)
自ブラゴエシチエンスク

ウシヤーコワ 六里五丁
カリツラーワ 三里半
アノソーワ 五里半

スコバリニツウイ 四里三十二丁

イグナチエーワ 五里廿七丁
エカテリノフカ 五里九丁

(電信局所在地)
ツアガヤン 七里十四丁
エルマーコワ 五里十四丁

ニコリスカヤ 六里廿七丁
クプリヤーノワ 六里弱
チエスノーコワ 四里半
ポヤールコワ 三里廿九丁
タイム 四里

ビビーコワ 六里廿三丁
スホーチナ 六里九丁
ブツセ 七里五丁
(電信局所在地)

クズネーツオワ 六里九丁
トロイ 六里九丁

チエルニヤエツ 五里三十三丁
(電信局所在地)

オルローワ 七里廿七丁
エリニーチナヤ 六里
スクエルベーワ 六里半
スギプチーワ 九里半

アニキンスカヤ 六里半
チヤノーワヤ 七里七丁
サボーリナ 五里七丁
(電信局所在地)

ワガノーワ 六里
トルブーシナ 五里三十二丁
ペグトローワ 六里五丁
(電信局所在地)

(電信局所在地)
イグチーシナ 六里三十二丁
アマザール 八里
ボクローフスカヤ 七里廿七丁

ウオスクレセンスカ 四里三十二丁
ゴルビチエンスカヤ 六里三十二丁
ウスチ、チエルナヤ 五里半

ベルムイキナ 八里九丁
ペイトノーワ 四里廿七丁
ウオスクレセンスカヤ 四里三十二丁
アルバジン 四里廿七丁
(自哈巴羅府約百四十八里一丁)
自アルバジン

(電信局所在地)
ウステスナヤ 六里七丁
ポウローツナヤ 五里廿七丁
(電信局所在地)
カラガン 五里十四丁

ルンジャンキナ 五里半弱
シウキンスカヤ 六里九丁
ポーツイ 六里九丁
ウクツイナ 五里半
ロームイ 四里廿九丁

ストレーチンスク六里
(自アルバジン約百四十里七丁)

鐵道	滿洲鐵道	全支線	全支線	全支線	東清線	西伯利線	全	全
	自旅順口 至哈爾濱	自南關嶺 至大房省	自大石橋 至柳樹屯	自營口 至大石橋	自哈爾濱 至滿洲里	自滿洲里 至カイダローフスカヤ	自カイダローフスカヤ 至貝加爾湖畔ムイソワヤ	自ムイソワヤ 至イルクーツスク

全	東清線	烏蘇里線	全	歐露線	汽船	自長崎各港航路	釜山	仁川	大連灣	旅順口	營口
至イルクーツスク	至哈爾濱	自ニコリスク	自浦鹽斯德	自モスコ			一六二	四五九	五八七	五九五	七四〇

百八十六	山海關	芝罘	太沽	元山	浦鹽	元山城津間	城津鏡城間	鏡城浦鹽間	仁川旅順間	仁川大同江
六八一	五六六	七三六	四六〇	六七七	一四六	六五	一六一	三〇〇	二二二	

第二章 朝鮮

▲地理概説 朝鮮の觀念吾れ人ともに久矣、地理人情風俗等、一般の概念は既に得たり、更に進んで特種事情の下に、特種の智識を得るこそ、必要ならめ、依て本書は實業家の知らざるべからざる、即ち實業的對韓經營に直接必然の關係ある地理に就て述べ、教科書的の地理を説く事を避く。

▲地味 我が山陰山陽の土質と酷だ類似し、強粘ならずして、砂質に傾き、容易に耕鋤し得べき、中等の性を有し、膏味ある穀物を産するに適せり、而して北韓は山脈東西に走り、互寒にして、地味瘠薄の場所多し、一鉢の地質は花崗石なりといふ、尙ほ各道に付て、述ぶる所あるべし。

▲水利 鴨綠江豆滿江の二大河、滿洲との境を限り、大同江漢江洛東江の大河を始め、載寧臨津榮山清川禮成蟾江錦江等、少なくとも、舟楫二十里を下らず、其他の細流國內に縱横分布あれば、灌漑の便、運輸の便、頗る多し、たゞ、法令其他交通機關の不整頓なるのみ、農業用工業用上、水に不便を感ずる等、

萬なかるべし。

▲氣候 概して云ひば、南韓の地温暖に、北韓は互寒なり、即ち南韓は、冬期日中華氏の四十度内外にして、十二月より二月中最も寒氣酷しく、十度を下る事あり、然れども結氷して運輸閉塞する如き、江河尠なし、往々之れあるも時期短し、夏期は常に八十度以上にして、九十度以上に昇る事稀ならず。

北韓即ち京城以北の地は、南韓に比すれば、非常に差ありて、鴨綠江の結氷の如き、能く人の知る所なり、之を氣候の概略とす、蓋し我邦に比すれば、關東地方は、南韓に比すべく、北韓を奥羽に比すれば、大差なからむか。

▲荒蕪地 朝鮮は、農業地なるに係らず、農政未だ整はず、人民進んで開墾の餘地を見出す事を爲さず、爲めに其遺利甚だ尠なからず、今耕すべき原野を擧ぐれば、平壤の野、載寧の野、内浦、儒域、清州の野、求禮、羅州、全州の野、尙州大邱晋州（慶尙）の野、咸興の野、等、其大なるものにして、數十里に亘れり、此内三南地方の野、最も耕耘に適す。

▲農業一般の狀態 韓國農民は、天に勝つ事を圖らず、偏へに年の豊凶

に放任し、一喜一憂天候の變笑に頼るの外なし、固より農家の業、一に天候に委するの外なきも、人智の進歩せる、幾分か人、天に勝つの計を爲し能はざるにあらざるべし。

而して從來韓國に行はれ居る農作法等を記すは、有用の事たるべしと雖も幼稚配するに足らず一方農業上の收支調査亦た忽かせにすべからざるを以て、彼を略し此を掲ぐる事とせり。

韓國の地味氣候前さに述ぶる所の如く、農業時間中、温度高く變激なきを以て、作物の生育甚だ速かなり、然れども、冬期は寒冷甚しきを以て、冬作を爲すこと能はず、南韓の地漸く少許の栽培を爲すのみ、而して肥料を施さずとも、園藝類は生育すといふ、之れ地味の善きにもよるべけれど、冬作せざるも原因の一なり、確實なる統計の依るべきものなけれど、一斗落（我邦の一斗蒔といふ如し）の秋穫は、二十斗乃至八十斗を得べしと、一に天運に委する農業にして然り、之に少しく文明的農作法を施さば、倍額の收納を穫る蓋し難きにあらざるべし。

地價 水田一斗落上等二十圓、並等八圓、最下等四圓の賣買價格なり、旱田一日耕（我二反歩）上等四十圓、並等二十八圓、下等二十圓の賣買價格なり、斯く低廉なる所以は、韓國金利の騰貴なる所以なりといふ。

租税 税法は之を結税 戸布税の二に分ち、之を直接税とす、其他海關稅庖厨稅紅蔘稅沙金稅等、間接稅として、皆土地に掛る。

結税を今我一町歩に對する等級を立て示せば左の如し。

海邊	一等田	六、八九四	山邊	一等田	四、五九六
	二等田	五、八六一		二等田	三、九〇八
	三等田	四、七八八		三等田	三、一九二
	四等田	三、八〇五		四等田	二、五三二
	五等田	二、七五八		五等田	一、八三九
	六等田	一、七二四		六等田	一、一四九
	平均	四、三〇五		平均	二、八六九

此他我邦の如き、所得稅登録稅、地方稅の賦課等なし、間接に負ふ處のものなきにあらざると雖も、我邦の租稅に比し、大に輕減なりと云ふ。

戸布稅は、一戸に付き六十錢なりしが、其後改正されたり、我邦の戸數割と稍々等しきもの乎、然るに戸布稅は、固と徴兵免除の爲め、課せられたるも、今や徴兵猶豫なきを以て見れば、其性質人頭稅に變じたるものなりと、いふ人あり。

小作 朝鮮の地主小作は、我邦の由來と聊か趣を異にする所あり、以前豪族跋扈の下に數百年を経過せる事、我邦の封建制の夫れの如くなりしかば、豪族（兩班）と普通人（常民）間に劃然たる區別を生じ、豪族は勿論地主の地位に立ち普通人は小作人の境遇にありて、主従の關係を生じたる事までは、徳川時代の藩主と人民の如くなりしも、我は明治維新と共に此制を打破し、今日の地主小作人の關係は、法理上より割出せる關係となりたるも、朝鮮はまた此制を改めず、依然たる舊慣による、但し、地主にして自作し、小作人にして、多少の耕地を所有するものある事當然なり。

小作料は、小作地より生ずる收穫を地主と小作人との間に折半す、其上往々血税を小作人に負はしむるものあり、其代りとして、地主より種子を小作人に給するものあるも、此等は特別の契約を要するものにして、原則としては、折半主義なり。

一斗落の水田にて、粗一石以上四石を得、(一石は我六斗八升六合、四石は二石七斗四升六合) 小作料は之を折半す。

銀四十圓を以て、購ひたる水田を小作に付すれば、公租及諸入費を引去り、純益一石乃至三石を收むべし、之を貨幣に換算すれば、一石を二圓五十錢と見積り、金利に割り當つれば、年六分二厘五毛より、一割八分七厘五毛となる、旱田の利益も、之に準ずといふ。

農民の生活費、十圓乃至十二圓を以て、一家三人一ヶ月を支ふべし、但し此は米穀野菜果實酒醬油味噌をも、購求すとの概算なり、之を自作するもの、固より夫れ丈の経費を減じ得べし、農家に限らず、比較的高價なるは、薪炭食鹽石油織物等にして、米穀其他の日用品は概して低廉なりとす。

土地賣買費、朝鮮の耕地計算は、以前の我邦の如く、種子の量を以て、一斗落一石落(我邦の一斗蒔といふ如し)と計算する故、其面積幾何なるか、土地の豊肥により、同じからざるを以て、我畝歩に換算し、一反歩の價格を示す。

水田 一反歩に付き、

下	中	上	土地價格	小作收入	收穫高	資金ニ對スル歩割
八	二〇	三二	同	同	同	同
八	二〇	三二	同	同	同	同
六八六	一、三七二	二〇五八	同	同	同	同
二、七四	五、四九	八、二三	同	同	同	同
三、四五	二、七五	二、五七	同	同	同	同

畑 一反歩に付き、

下	中	上	土地價格	小作收入	收穫高	資金ニ對スル歩割
五〇〇	一〇、五〇	一六〇〇	同	同	同	同
五〇〇	一〇、五〇	一六〇〇	同	同	同	同
五一〇	八五五	一、二〇〇	同	同	同	同
一、六三	二、七四	三、八四	同	同	同	同
三、四二	二、六	二、四	同	同	同	同

労働費 日雇人夫一日の勞銀は、諸式労働者持にて、二十錢前後、雇主三食を與へ且つ酒烟草を給すれば、一日五錢、以上八錢迄なり。

牛の備賃、飼料を與ふれば、二十錢乃至四十錢、若し之を育へざるときは、四十錢乃至六十錢、一日の飼料十二三錢位なり。

牛の耕作力は一日に三斗落若くは六斗落位人夫の勞働力、一斗落乃至二斗落、之れ人類より、却て畜類の勞銀多き次第なり。

米の收穫高、中等田に於ける、米の收穫高は、一斗落に付き粳二十斗乃至三十斗、(一斗は我四升七合)而して之を平均するに、上田の收穫地方に依り同じからすと雖も、朝鮮全部を通じ、一斗落の粳量、三十斗より四十斗の間を

往來するを以て、三十五斗落となり、中等田は全く二十斗に相當し、下等田は十斗と十五斗の間を往來せり。

米の價格 中等田平均價格本樹一石に付き、粳十六兩、玄米三十五兩、白米、四十二兩、小麥二十三兩、大豆二十五兩、赤豆三十兩、黑豆二十八兩なり。

▲森林一般の状態 苛税の結果は、濫伐となり、林政廢弛し、人跡絶て稀

なる深山の外、森林と稱すべきものなし、今後の造林を待つの外なからむ。

然れども、森林地と稱し殖林さへすれば、自然の大森林を造る事を得る場所尠なからず、平安道城江界郡より慈城厚昌の二郡を超え、咸鏡道の長津三水

に到る間の森林は、韓人等の常に誇る所にして、東西の長八十里、南北の幅十里乃至二十里、千二百方里の大森林なりとす、此他鳥嶺山林も六方に亘

り、慶尙道より忠清に誇る。生育の樹種赤松其大部を占め、何等の保護するなきも、此樹のみは、二十年

を経過せずして、良材を爲すといふ、其他樅、五葉松、落葉松羅漢柏あり、

楡栗棒櫟鹽地シナノキ、イタヤ楓類バクタラナシム、ニレ、胡桃等あり。朝鮮に於て、材木として用うべきは、赤松唯一なる事は、注意すべきことなり。

▲工業一般の状態 朝鮮の地、固と工業國にあらず、特に記すべきものなし、

全羅江華島の二に於ける華筵、之れとても、農家の片手間仕事なり、開城府に遺れる古代高麗燒と稱する陶器、これには珍品あれど、敢て工業の物産と

なるに足らず。

▲漁業一般の状態 韓國沿岸の漁業こそ、朝鮮を通じての最大富源なるべし、中に咸鏡道の明大魚、江原道の鯧、全羅慶尙の鯛、石首魚之を稱して、朝鮮の五大漁業といふ。

漁業の種類及漁業地

捕鯨漁業 蔚山灣、通川灣、迎日灣、馬養島、元山灣内の松田港、咸興郡の西湖、端川郡の遮湖富寧郡の青津、鐘城郡の楡津灣、期節は八月頃咸鏡北部十月より二三月迄、慶尙の北部及び江原道海中、故に十月頃より翌四五月迄とす。

明太魚業 咸鏡道洪原郡の前津、以北より、端川郡梨湖に至る近海三十里に亘る、就中新浦新昌遮湖を焦點とす、陸を去る二三海里より五六里まで資本は新造船とも千圓餘。

鯛魚業 韓海悉く産せざるなきも、江原慶尙全羅忠清黄海の沿岸とす、期節は四月より六月までとす。

鯧魚業 馬山浦口、鎮海灣、固城沿岸、巨濟島沿岸、欲知島、濟州島附近、蛇梁島南海島とす、漁期七月より十二月まで、其最盛期九月十月の二ヶ月。鱈魚業 濟州島方面(春秋二季)巨濟島、全羅道の西面麻介島、里山島附近、迎日灣より新浦に至る附近、期節は場所により同じからず、濟州島は秋季を主とし、全羅道は五月より八月までとし、迎日灣は、五月より七月、九月より十一月の二期とす。

石首魚漁業、韓國西海岸中、全全道の七山島灘、黄海道延平島、平安黄海の境界なる於龍島を其主たる漁業地とす。

北韓地方に於ける明太魚漁業と、全羅の石首魚は南北相並んで、朝鮮の最大漁業にして、初期の漁魚を食せざるものは、朝鮮住民にあらざるとまで、稱せられ居る魚なり。

此他鯖鱒、鱒魚、鰻、大刀魚、鮫、鱈、天草、和布貝類一として豊富ならざるなし。

▲鑛山一斑 朝鮮の鑛業は、金、砂金、鐵、銅を重なるものとするも、金砂金は全鑛山の九分通を占む。

著名の鑛區左の如し。

京畿道 安城、通津。
 忠清道 稷山、清州、忠州、文義、公州、青山、報恩、永同、黃潤、銀山、保寧、金山。
 全羅道 金溝、南原、全州、寶城、靈岩、茂山、稱山、鐵山、光州。
 慶尙道 青松、義城、星州、慶州、晉州、蔚山、安東、柴原、昌原、(三ヶ所)
 あり九龍山八龍山狹川) 漆原 達田藏岩
 江原道、金城、平康、淮陽、歙谷、洪川、春川、麟蹄、原州、橫城、三涉、旋春。
 咸鏡道 富寧、端川、(五ヶ所) 甲山(五ヶ所) 長津(六ヶ所) 定平(四ヶ所) 永興(七ヶ所) 明川(三ヶ所) 吉州(二ヶ所) 城津、鏡城(三ヶ所) 三水(二ヶ所)
 平安道、平壤、順安、般山、雲山、成川、朔州、宜川、安州、義州、秦川、徳川、价川、熙川、慈山、寧邊、慈城、江東、江界、昌城、龜城、江西、厚昌(三ヶ所)。

黄海道 松禾、長淵、遂安、載寧。

右の内鐵鑛は、平安道の价川及び龜城、黄海道の鐵原、江原道の洪川、慶尙道の慶州、咸鏡道の文川を以て、著名なるものとし、多くは金及び沙金の鑛區とす、此他平安道の般山平壤に無煙炭あり、厚昌の銅あり、特に咸鏡道甲山の銅鑛は最も有名なり。

外國人の手に歸せる金鑛四ヶ所あり、雲山鑛は米人モルルス氏、我が明治二十八年に採掘權を得、堂硯鑛山は、三十年獨逸人ウヲルターの有に歸し、其三十年には、英人モルガン般山鑛を得、同年復た忠清道稷山の金鑛を我が邦人に得らる。

鑛業税 韓人なれば、鑛夫一名に付き、一日一匁の砂金、外國人なれば、純益の四分の一、皆な韓國皇帝陛下の御手許金の收入となる、韓人採掘を爲すや金及び砂金を採掘するも、決して之を製煉する事なく、金塊若しくは砂金のまゝ、韓人の問屋に賣却し、問屋亦た相當の利潤を得て、日本及び外國人の鑛業者に賣却す、これ等も亦た注意すべき點にして、何等かの方法案出せずんばあるべ

からず。

▲各道の牛産物及其集散地

平安道 鐵を以て本道の富源とす、地味亦た肥沃穀物果實を産し、山には獸皮獸毛獸肉あり、水には水獺魚介あり、其他鑛石人參を本道の物産とす。

集散地、成川、安州、寧邊、定州、義州、龍巖浦。

黃海道、蜂蜜、麻油、絲、綿、牛、鐵、銀、銅、其他の鑛物、及び人參五倍子。

集散地、海州府、延安、白川、金川、鳳山、載寧、黃州、豐川、長煙。

京畿道、人參、大豆、牛、絲、石材、石灰、銅、鐵、陶磁器。

集散地、五江、(龍山、揚花津、麻浦、蠶島、鷺梁津、永登浦、水原府、江華島、喬桐島、驪州、廣州府、長湍、開城府、京城。

忠清道、儒城、清州は農業地、穀類、牛、人參、綿、鐵、砂金、石材。

集散地、公州府、江景、平澤、長岩鎮、沃川、清川、忠州府、可興、金遷。

全羅道、氣候温暖土地肥沃、米麥棉花、楮、竹、木、柑橘、牛、馬、鹿、海草、鮑、人參、其他鑛物、磁器。

集散地、全洲府、礪山、臨波、南原、光州府、羅州、靈光。

慶尙道、土地頗る肥沃、山海の産地、韓國第一なり、朝鮮の産物一として、本道に産せざるなし、今逐一品名を掲ぐるを省く。

集散地、草梁、釜山鎮、東萊、龜浦、梁山、勿禁、三浪津、密陽、蔚山、慶州、安東、尙州、洛東津、善山、大邱府、星州、陝州、晋州府、統營、金海、昌原。

江原道、土地瘠せて水田少なく、農産物從て少なく、海に鹽、魚介の利あると、砂金鐵銅其他鑛物、牛、虎、豹、熊、麝香等其他の産物なり。

集散地、春川、原州、鐵原。

咸鏡道、氣候寒く土地瘠せたり、然れども、明太魚の漁利は此道を最たるものとなす、特に砂金は韓國第一にして、端川の大豆、北關の麻、生牛最も著名なり。

集散地、咸興、永興、鏡城、吉州、茂山、慶源、慶興府。

▲韓國商人の金融機關

韓國商人が賣買上の状態は、敢て本邦人と異ならず、たゞ店頭商品の飾付け、商慣習などに、多少の相違あるに過ぎずと雖も、爰に最も異とするは、商人の金融機關なり。

元來朝鮮商人間にも問屋營業なるものありて、此問屋は二様の活動を爲すものなり、一は問屋本來の職務、即ち我邦の卸問屋の如き之れなり、其一は商人間の金融機關たる事之れなり、問屋は各市街に數軒あり、地方商人若し己れの營業部類に屬する商品を、互市場に輸送販賣し、又は外人と取引を爲さんとするときは、必ず此問屋に委託販賣を爲す、仕入をなす時も又は必ず此問屋に依頼す。

倍て商品を取屋の手に托し賣込を爲し、手形を受取りたるときは（我が法律上の手形の謂にあらず韓錢手形とて、其法律上の性質は預り證券なり）此手紙を自己の信用せる、最寄の問屋に就て割引を爲し、或は其手形を抵當として、更に仕入を爲す、且つ問屋は、大抵問屋同士の連絡もあり、地方商人又開港場商館との連絡もあれば、其中間に立ち爲替業をも營む、此爲替業は個人間に限ら

ず、政府人民間租税の出納をも司る事、我邦の三井安田等の銀行の如し、例ば人民が租税を納むるに際し、其役所附近の人民は、直接正金を以て上納する事を得るも、遠隔の地に在る人民に至つては、頗る不便なるを以て地方最寄の問屋に上納方を依頼す、然るとき問屋は、役所附近の取引問屋へ、相當の商品を送り、其商品を賣拂はしめ、領受したる金錢を役所に上納す、勿論問屋は其間に立つて、相當の利潤を得。

第三章 亞比利亞

▲區劃

全土を十に別ち、樺太島を合せて、都合十一州より成る、トボリスク、トムスク、エニセイスク、イルクツク、ヤクツク、アクモリンスク、セミバラチンスナ、後貝加爾、黒龍州、沿海州、及び樺太島之れなり。

▲氣候 名にし負ふ北寒帯の曠漠たる土地なるが故に、氣候の變化甚だしく同緯度に位する他の國よりも、頗る寒冷なり、これ地勢の然らしむる所、其海岸に到るに従つて、低地となれば、北極圏の寒冷なる空氣を遮るものなく、其

南境界には、アルタイ、ヤブノロポイの連山重疊して、南方より來る溫暖の大氣を拒むが故に、氣候甚だしく寒冷なり、ヤクツク洲の北部フェルコヤンスクは、世界中最寒冷の土地として名高し。

一ヶ年の平均最高温度攝氏四度半位にして、浦鹽斯德附近の温度之れなり、又た一ヶ年平均最寒温度平均東西兩部を除きては、氷點以上に昇る事稀なり、一年の内一月最も寒く、其變化甚しく、愛すべき春秋の二季なく、忽ち一月より飛て夏季となる、斯くの如く互寒にして且つ激變の氣候なれば、人體に害あるべしとの豫想に反して、事實は決して然らず、東部西比利亞の如きは、尤も健康に適し、バイカル湖南方のチダ附近の地も、未だ嘗て一人も肺病患者を出したる事なしと。

雨量は概して多く、西部三八〇、ミリメートル、東部三六〇、ミリメートルなり。

▲人口 曠漠たる此地面積に比し、人口甚だ少なく、爲めに重要な富源も開拓するに由なし、露政府之を憂ひ、往昔より人口増加策として、犯罪者追放案を實行し、或は幾多の便宜を與へて、移住を奨励する等移民の増進を圖れり。

千八百八十九年六月十三日移民法を改正して、移民一人十五アシアチンの耕地を下附せられ、初め二年間免稅、次の三年は租稅半額、六年後の第一年一アチンアチンに就て二留七十一哥を納めしむることとせり、此他移住當時一家族（六人以内）に付き、一時金百留を貸與し、鐵道乘車賃を割引する等の奨励等もあり、されば此法令の出づると共に、移民亦増加し、千九百一年には十二萬八千百三十一人の多きに達せり。

千九百年の人口調査に依れば左の如し。

州縣名	人口	州縣名	人口
トホリスク縣	一、五四五、一八一	セミバラチンスク州	六七八、二二二
トムスク縣	二、〇六四、五一七	後貝加爾州	六八四、八九〇
エニセイ縣	六〇七、八五一	黑龍州	一四〇、六三〇
イルクツク縣	五二九、七三八	沿海州	二七二、七六七
アクツク州	二五八、二八三	樺太島	二八、一六六
アクモリンスク州	七五八、四三三		

之を面積の一二、〇〇六、六九一方露里に分配すれば、一方露里内僅かに二人弱となる。

▲農業一般の状態 面積に比し農業地の狹隘にして、其耕地の僅少なる事驚くべくして、全面積の十分一に過ぎず、西部曠原地方より東方に來るに従つて、西比利亞の農業地と稱せらる。

今農業地と稱せらる地方を擧ぐれば。

- 第一、イーシム曠原 烏拉地方とオムスク市の間。
- 第二、バラバ曠原 集放地カインスク市
- 第三、阿爾泰地方 最も主要なる農業地なり、
産物集散の中心點をバルナウル、ルカルノワの二市とす。
- 第四、トムスク及びマリンスク地方。
- 第五、中部亞比利亞鐵道に沿して、イルクツク市に至る狹隘なる地方、及びエニセイ上流、ミヌシク地方。

第六、後貝加爾の南部ゼイヤ、ブレイヤ南河域及び沿海洲の烏蘇利地方。

▲地味 重重なる農産地の地味は、黒壤にして肥沃なれども、曠原地方トボリスク縣内にては、降雨少なく且つ惡蟲の害あるが故に、地味の肥沃なる割合

には、收穫少なく、之に反し黒龍省地方は、降雨のみ多く寒氣の襲來急速なるが故に、耕作に非常の不便ありて收穫も亦多からず、されど亞比利亞全部を通じて、計算すれば、平均高種穀一粒に付き、五粒六粒あれば良作とすべしと。

▲耕地反別 聊か古き統計なれど、參考の爲め千八百九十九年の調査に係るものを左に掲げん。

(一デシヤンは我一丁一反歩に當る)

州	縣	耕地面積	種穀を除きたる總收穫	住民一人に對する總收穫
トムスク	縣	一、三六二、七九二	七一、六四五、一〇〇	三七、八三
トボリスク	縣	一、一三七、一四四	六三、二四九、八〇〇	四五、三八
イルリツク	縣	一、一三七、一四四	六三、二四九、八〇〇	四五、三八
イニセイ	縣	三四〇、七八二	二一、一六〇、五〇〇	四一、一七
アクモリンスク		二二四、七二四	一一、〇六四、七〇〇	一七、八四
セミバラチンスク		一〇三、八八〇	三、三六九、九〇〇	五、三〇
沿海		六一、五八〇	二、四八二、〇一五	一〇、〇〇
黒龍		一三一、五一	五、八五〇、四七五	四一、五〇
後貝加爾		不詳	一一、二八〇、〇〇〇	二四、五〇
ヤク		一八、九〇九	一、一二二、〇〇〇	四、五〇

▲農産物 穀物中主要なるものを小麦とす、其産地は西部亞比利亞を第一とす、小麦に次くものは、燕麥、裸麥、大麥、馬鈴薯、稷等を重なるものとし、一九〇一年の産地産額左の如し。
(布は我四貫三百六十匁)

品名	州		
	エニセイ縣	イルクツク縣	トボリスク縣
裸麥	二、五八〇、三〇〇 _布	三、六九四、六〇〇 _布	三、七四五、九〇〇 _布
小麥	四九、四〇〇	不詳	不詳
小麥	一、八七一、八〇〇	一、八七一、八〇〇	九、二〇九、四〇〇
燕麥	一、七〇〇、六〇〇	二、四九八、〇〇〇	八、二九五、八〇〇
大麥	一七七、六〇〇	七八九、九〇〇	一、〇七七、五〇〇
稷	五〇、一〇〇	一四、五〇〇	九九、三〇〇

品名	州		
	トムスク縣	アグモリンスク縣	セミメラチンスク縣
小麥	四、八六五、四〇〇 _布	七一、三〇〇 _布	一三、八〇〇 _布
小麥	一三三、五〇〇	五〇〇	不詳
小麥	一四、五〇八、一〇〇	二、六五四、一〇〇	七一〇、四〇〇
燕麥	六、六一八、一〇〇	一、〇三〇、四〇〇	三五四、二〇〇

品名	州
大麥	六〇七、八〇〇
燕麥	四八八、〇〇〇
小麥	三四八、八〇〇
小麥	一六六、一〇〇
小麥	三六、九〇〇
小麥	二〇六、七〇〇

穀物の價格は、年の豊凶交通の便不便等によりて、差別ありと雖も、之を平均すれば、小麦一布の代三十哥乃至五十哥位なるべし。

(當時の一哥は我が一錢二毛に當り其百哥は即一留なり)

耕作の方法概して隔年輪作なり、即ち一年は播種し、次の一年は耕耘するのみにて播種する事なし、斯く隔年に穀物を作り、十五年乃至二十年の後、地味稍々衰ふれば、之を數年間荒蕪に附し、地力の恢復するを待ちて、再び耕作地となすなり、農具は、最近まで古風のものなりしが、鐵道の貫通と共に種々の改良農具を輸入せられたり。

▲牧畜 西比利亞産業中比較的豊富なるは、牧畜なり、固より規則立ちたる飼育法は之れなけれども、産額の多きは、世界に誇るに足る、トムスク、トボリスクの如き、人口百人に付き馬七十頭牛八十頭羊豚各百五十頭を所有する割合なりと、這は人口の稀薄なるにも由るべけれど、要は牧畜盛なるに原す、千

九百年の調査によれば、全國を通じて、馬、牛、羊、山羊、豚、駱駝、鹿、犬の頭數、二、二四三萬六三六五頭ありて、中に馬牛羊最も多く、トムスク、ト

ボリスク兩縣を以て、斯業の盛大なる所とす。牛の價牝牛二十留より三十五留位にして牡牛は十七八留より三十留位なり。西比利亞の馬は、運搬用に不適なりと、矮小なるが故ならんか、然し乘馬に適當なり。

牛馬は、多く歐露より全歐洲に輸出され、歐人の食膳に上る、千九百年の調査に依れば、馬二千七百四頭、牛九千七百五頭の輸出あり、牛肉も西比利亞鐵道の輸出高、二百四十萬五千七百七十七布あり内、歐洲行百九十八萬二千六百六十三布なり。

▲森林 西比利亞の森林帶は、頗る廣大なりと雖も、人口少なきが故に、未だ十分に之を利用するに至らず、その利用せられつゝあるは、僅かに鐵道附近の地なりとす、森林最も多きは、トムスク、エニセイスク、イルクツクの三縣にして、次はトボリスク、阿克モリンスク地方なり、此等森林とても、盛に利

用せられたるは、鐵道敷設以後にて、殊に薪材の需用は、年々に増加せり、價格は薪材一立方サーチエンに付、十留以上二十留位とす、材木の種類は、甚だ尠なく、二三種を除くの外は、建築用材となし能はざれば、年々歐露より輸入するもの甚だ多し。

さて森林業中唯一の輸出品は、松實にして千九百年の鐵道輸出高六萬七千四百布餘に及び、此品は、春季若くは初夏に於て、收穫最も多しといふ、價格は一布に付き、一留五十哥以上、二留五十哥位なり、されど近年惡鳥禽群集する爲め、大に其收穫を減じたりとか。

▲鑛業一斑 亞比利亞の鑛業は、甚だ幼稚にして、採掘の方法また發達せざる爲め、可惜寶玉を地中に埋没し置くの甚だ遺憾に堪へざるものあり、獨り砂金のみは其業大に見るべし。

露人の言に依れば、西比利亞の地底は、總て黄金なりと、實に到る所金の存せざるなし、其他鐵、石炭、鹽類を産す、西比利亞の富源實に此に存す、後章再説する所あるべし。

▲商業 工業及び貨物集散地
 工業 甚だ幼稚なり、之れ蓋し露人の起業心に乏しきと、交通不便なると、資本缺乏の原因なるが爲めなるべし、中に比較的發達したる地方は、トムスク、イルクツク兩縣にして、貝加爾湖以東に殆んど工業なしといふも可なり。トムスク、イルクツク附近にては、手工業機械工業共に發達し、現今全く其附近の需用を充たすに足る、固より大なる而して文明的なる工業は見る能はず、何れも日用品の製造なりとす、加之其製品粗惡にして、到底新移住者外來者などの、需要を充たし得べきにあらず。

其重なる工業製品は、**麥粉、酒精及び火酒、熟皮、獸脂、石鹼、精製羊毛皮、硝子、煉瓦、機械類、セメント、麥酒、牛酪等とす**今製造產地產額を左に擧ぐ。

麥粉	產地	製造箇數	產額
トムスク	トムスク縣	一八二	九九七、〇〇〇
イルクツク	イルクツク縣	一二	一二一四、〇〇〇
トムスク	トムスク縣	?	?
イルクツク	イルクツク縣	?	?

精製羊毛	石鹼	獸脂	熟皮	及酒	火酒	酒精	沿海	州縣	後貝加爾縣
トムスク	トムスク	アトク	セムラ	エニ	イトク	トムスク	沿海	州縣	後貝加爾縣
?	?	?	?	?	?	?	?	?	?
三、五〇、〇〇〇	一、七〇、〇〇〇	一、四〇、〇〇〇	一、四四八、〇〇〇	一、五三三、〇〇〇	一、五七〇、〇〇〇	四〇〇、〇〇〇	一、〇七四、〇〇〇	五九八、〇〇〇	七四〇、〇〇〇
二七九	一四三	一六	三七	七六	九六	二二	三三	三四	一八六
二七九	一四三	一六	三七	七六	九六	二二	三三	三四	一八六
二七九	一四三	一六	三七	七六	九六	二二	三三	三四	一八六
二七九	一四三	一六	三七	七六	九六	二二	三三	三四	一八六
二七九	一四三	一六	三七	七六	九六	二二	三三	三四	一八六
二七九	一四三	一六	三七	七六	九六	二二	三三	三四	一八六

麥	陶	マ	羅	機	文	蠟	獸	硝
		ツ		房		脂		
酒	器	チ	紗	械	具	燭	製	子
ト	沿	イ	ト	ト	ト	エ	ト	ト
ム	ル	ル	ム	ボ	ボ	ホ	ム	ホ
海	ク	ク	リ	リ	リ	リ	ス	ス
ス	ツ	ツ	ス	ス	ス	セ	ス	ス
ク	州	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク
一五	一四	?	五	三	六	?	?	六四九三
一九一、〇〇〇	一七五、〇〇〇	二一六、〇〇〇	一三八、〇〇〇	六四、〇〇〇	二六三、〇〇〇	三九九、〇〇〇	一〇四、〇〇〇	一五八、〇〇〇
								八八、〇〇〇
								六一、〇〇〇
								一〇四、〇〇〇
								?

商業會議所 トムスク市及び浦鹽斯德市に各一の商業會議所あり、トムスクの會議所にては、西比利亞物産一として、取扱はざる事なきも浦鹽斯德市は、最近の設立に係り、未だ商品を取扱ふに至らず。

銀行 (一) ニーデニー、ノウゴロツトサマラ農業銀行、(二) ヤロスラーク、ヤストロム

農業銀行、(三) 露西亞外國貿易銀行、(四) 露清銀行、一名露華道商銀行 (五) 西比利亞商業銀行等ありて、又た税關稅務署ありと雖も、概して經濟界振興せず、一ケ年の取引總計一億七千萬留にて、此他歲市の取引高又は製造工業の製産高と合算するも、四億三千万留を越えず、次に農業牧畜の生産高四億三千万留に近く、砂金採取高三千万留位に留まる、廣袤千二百萬露りの西比利亞も商工業に付ては誠に微々たるものなり。

商人の階級 千八百九十八年六月を以て發布せられたる、營業稅法に依れば、商人を五等に別てり。

- 一 等
- 一ケ年營業高三十萬留以上の仲買商。
 - 資本金二十萬留以上の銀行業者保險業者。
 - 穀物五十萬布以上を容るゝ倉庫營業者。
 - 一ケ年五千留以上に相當する屋賃の飲食店。
 - 一等及び二等の藥舖。
 - 一ケ年二十萬留以上の賣込を爲す用達商及び請負業者。
 - 一ケ年五萬留以上三十萬留の營業を爲す仲買商。
 - 資本金五萬留以上二十萬留の銀行業保險業。

二 等 五十萬布以上を容るる倉庫業者、各種の雜貨保管業者。

五千留以下に相當する家賃の飲食店、下宿業、酒精火酒葡萄酒卸賣業者。
一ヶ年千留以上二十萬留以下の賣込を爲す用達商請負業。

家族の外に一人の手代を使役する小賣商。

一ヶ年一萬留以上五萬留の營業を爲す仲買商。

一萬留以上五萬留以下の銀行、保險業者。

食卓を供せざる下宿業。

三 等

一室以上を有する喫茶店、咖啡店。

外國の酒類とならざる酒小賣店、三等四等の藥舖。

一年千留以下の家屋に住する書店。

一人の手代もなき小賣店。

一ヶ年二萬留以下の仲買商。

四 等

資本金一萬留以上の銀行業者。

一室のみの喫茶店、咖啡店。

一ヶ年五百留以上の賣込を爲す用達商。

五 等

市外に於ける行商及び配達者

右の階級に應じて順次租税を徴す。

▲貨物集散地

土地茫漠たるだけ交通不便にして、鐵道は西比利亞鐵道、後貝加爾鐵道、烏蘇里鐵道の三のみ、他の道路も西比利亞街道、キヤフタ街道、曠原地方、アルタイ地方、北方亞比利亞、アヤンスキーの大街道は存するもの、一躰に不便なり、今此等街道に横はる貨物集散地を擧げん。

ニコライエスフク市、黒龍江口の一市街にして海産物の輸出あると、製茶鐵器の輸入を司る、輸出額五十萬布なり。

ハバロフスク市 松花江の下流黒龍口の東に在りて、交通の便開けたり、滿洲と交易を爲す唯一の地にして、其實は、南清品と日本品なり。

ブラゴウエシムエンスク市 黒龍江の上流、滿洲の中服に相對する市街なり、後來有用の集散地は蓋し此の市なるべし、當今にても、千萬留の取引あり。

恰克圖 蒙古の賣買城に隣れる小驛なり、支那製茶の輸入を以て名あり。

以上は外國品の輸入ある市場のみ、其他内國品の集散地としては。
ニコリスク市、ウスリスキー市、バハロスク市、チタ市、イルクツク市、クラ
スノヤルスク市、トムスク市、ラムスク市、チエコニ市、ブラゴクコンスク市

等あり、此他歳市と稱するもの各驛にありて、月に幾回と其日を定めて市を開
といふ。

我邦にも其例あれど、世界中未だ西比利亞の如く盛なるを聞かず、蓋し未開の
徴なり。

▲漁業概略

沿海洲沿岸の魚族甚だ多しと雖も、漁業術未だ進歩せず、之
に従事せるもの極東の海岸に従事せるもの、外は、オヒエニセイ、黒龍江岸の
少數斯業者あるのみ、其魚族には、ネリマ、河鱒、ムクスン、スイロク、鮭、
鯡、の海魚と、スラルレデ、ナリーム、シチウカ、タイメン、等の川魚あり、
川魚は春季に河口に下つて孵化し、七八月頃上流に上り、海魚は、五月末河川
の上流に溯りて孵化し、七月末海に歸るさま、河魚と交替するが如し。さて到
る所漁業組合あれども、多くはトボリスク、トムスク、チイメイ、エニセイ、
諸市の大漁業家に隸屬し、行動を爲すものの如し、此大漁業家は、殆んど特許
の有様にて、濫漁を行ふか故、魚族年々減少する傾あり、其方法も頗る不整頓
にして見るべきものなし、千九百年の鐵道輸送價格三十七萬二千二百八布あり。

狩獵も亦た頗る産額多く、毛皮類には、栗鼠、狐、黄貂、ゴルノスタイ、黄鼬、
臘肉、狼、兎、等、又た羽毛には、梟、鷹、鷲、を最も多しとし、此等の産額
栗鼠は、一年四百萬枚、一枚の價十二三留なり、鷲の翼は、一對に付き灰色の
者六七留、黒色の者二三留なり、此他食料野生の鳥獸類は悉く歐露に輸送さる。

第四章 浦鹽斯德

露國鎮東軍港浦鹽は、獨り西比利亞の貿易港なるのみならず、實に極東に於け
る大互市場なり、始め露國は該港を以て、軍事の港となし、攻畧防禦極東の事
一に此に頼つて事を擧げんとせしに、交通の便は單に軍港たるに止めしめず、
商業上の一大要港とはなれり、人口三萬弱日本人あり清韓人あり、歐露々亞歐
米人等、東洋に志あるもの、必ず浦鹽に駐在せざるなし、若し夫れ日露戰爭後
西比利亞滿洲樺太の産業開くるに於ては、亦た幾層の殷富を極むるならむ。

輸	出	額	輸	入
		二、三三三、〇〇〇布		二一、七六一、〇〇〇布

(千九百年露國中央應調)

輸出品は、歐露より輸送せるものと、西北利亞滿洲北部の特産物（前每章参照）
 として、輸入品の重なるものは、藥品紙類、文房具、繩索類、棉花、酒類、
 小間物類、金屬製品、食料品、菓子、諸罐詰、石油、皮及皮製品、石炭、
 諸織物、麥粉、穀類、礫石礫水、家具庖厨具、石鹼、銃器、獵具、衣服、毛布、
 敷物香料、麻布、米、鹽、鹹肉、鹹魚、靴類、砂糖、マツチ、煙草果實、陶器、
 硝子、セメント、茶類、毛織物、政府用品、鐵道具其材料、雜貨等とす。
 又た之を船籍各國に分てば。

(輸出)

船籍國	諸外國行	歐露行	露亞行	通過貨物	合計
露亞	二六六、六〇〇	三〇六、二〇〇	一、六八一、〇〇〇	二七七、三〇〇	二、五三三、一〇〇
日本	一〇九、九〇〇		一〇〇	四四八、六〇〇	五五八、六〇〇
逸本	一七九、六〇〇		二六九、六〇〇	三三、六〇〇	四八二、八〇〇
吉米	一四四、五〇〇		二〇二、九〇〇	二三七、七〇〇	五八二、一〇〇
北米	五七、六〇〇		三六、〇〇〇		九三、一〇〇
合計	七七三、七〇〇	三〇六、二〇〇	二、六二四、六〇〇	一、〇八七、二〇〇	四、七九一、七〇〇

(輸入)

船籍國	諸外國より	歐露より	露亞より	通過貨物	合計
露亞	九〇八、四〇〇	八、四八四、五〇〇	二、一五五、一〇〇	二七七、三〇〇	一一、五四六、三〇〇
日本	一、八一五、九〇〇		一一六、二〇〇	四八八、七〇〇	二、四二〇、八〇〇
逸本	一、七二〇、七〇〇		六四六、二〇〇	三三、六〇〇	二、三九〇、五〇〇
吉米	一、八三二、〇〇〇	二五七、三五〇	一七一、八〇〇	二九五、八〇〇	二、五五六、九〇〇
北米	一〇七、五〇〇		二八三、〇〇〇	一四五、八〇〇	三九〇、五〇〇
諸國	一、七九一、八〇〇	二三八、五〇〇	三四八、五〇〇		二、二八六、一〇〇
清國	三三四、九〇〇				五七三、四〇〇
朝鮮	三、〇〇〇				三、〇〇〇
合計	八、五五五、八〇〇	八、九八〇、三〇〇	三、七二〇、八〇〇	一、二四一、二〇〇	二二、四九八、一〇〇

各國商船の出入頻繁なる如上の表により之を知る事を得べし、中に露、日、英、

諸の船を以て、最も多しとす。

千九百一年の調査に係る。(露國中央統計局) 輸出入の商品價格は、四、七九一、一〇〇布の輸出に對し輸入高二二、四九八、一〇〇布とす、日清兩國よりの輸入最高も多く、而して其前年までは、露本國の輸入品少く、各國の輸入品多かりしに、其翌年有稅港となせしより、俄然形勢一變し、各國の商品大に其數を減じ、露本國の商品優勢となれり、今日本より浦鹽へ輸送するもの、内五千布以上のものを擧ぐれば左の如し。

日本よりの輸入品五千布以上

鹽	家	機	石	鐵	繩	藥
具	械	炭	詰	品	索	類
野	米	麥	織	石	食	棉
菜	粉	物	油	品	花	具
						房
						料
						文
						一
						二
						三
						四
						五
						六
						七
						八
						九
						〇
						一
						二
						三
						四
						五
						六
						七
						八
						九
						〇
						一
						二
						三
						四
						五
						六
						七
						八
						九
						〇
						一
						二
						三
						四
						五
						六
						七
						八
						九
						〇
						一
						二
						三
						四
						五
						六
						七
						八
						九
						〇
						一
						二
						三
						四
						五
						六
						七
						八
						九
						〇
						一
						二
						三
						四
						五
						六
						七
						八
						九
						〇

雜	茶	陶
貨	器	
二九、九五六	二九、二二二	二九、六〇三
鐵	セ	
道	メ	
用	ン	
材	ト	
二九、六〇三	二、〇五五	五九、五七三

第五章 樺太島

今より三十年前明治八年、暴露の強請に依り叢藪たる千島群島と交換すべく餘儀なくされたる、此北門の寶庫も、今や天運循環再び我手に復歸する好機は來らんとす、國民の發展すべき新天地として、疑を容れざるに際し、茲に實業開展者の指針として、同島の地理誌を概説する事左の如し。

▲位置 北緯四十五度五十四分に起り、五十四度五十三分に終り、東經百四十一度四十分より、百四十四度五十三分に終る、南北の長さ凡そ我百二十五里、東西の幅員最も廣き所三十一里、其狭き所僅かに六里餘、總面積四千九百方里にして、恰かも我北海道の本島と粗々等し、山脈は島の中央を貫く事脊髓の如く、其最も高き巒峯四千呎を超えず。

▲區劃 全島を三州に區分し、北部をアレキサントルフスキ州、ツイモフス

キ州とし、南部をコルサコフスキー州とす、アレキサントルフスキー州は、西
海岸一帯の地を稱し、南ヤナシ河を界とす、ツイモフスキー州はトエマ、ボロ
ナヤ兩河の附近を云ひ、コルサコフスキー州は、南部サガレン島ノヤシ河及びペ
テルニー岬に至る東海岸をいふ。

▲水利 細河沼湖は幾百となく流出散在せる中に、ツイマ河、ボロイナ河、
ナイプテ河、リウタカ河、等の大河ありて、灌漑に便なりと雖も、惜むらくは
舟楫の便を欠く、されど、鮭は此等諸川の河口に生育し、一の富源を成す。

▲氣候 アレキサントルフスキー氣象臺に於て觀測せる昨年明治三十六年の各
月平均温度統計表左の如し。(攝氏寒暖計)

一月	零下二十一度二分	二月	零下十五度二分
三月	同 十度一分	四月	同一度
五月	五度九分	六月	十一度
七月	十六度二分	八月	十七度
九月	十一度四分	十月	三度七分

十一月 零下五度五分 十二月 零下十三度八分

斯くの如く寒氣峻酷にして、氣候一定せず、濕氣多く、濃霧日光を遮り、夏季
降雨多く、冬季は吹雪烈しく、殊に北部に至れば、十一月頃より韃靼海峽の海
面一帯結氷し、人馬の通行却て自由となり、橇に乗りて結氷上を西比利亚に通
行する事を得べし、南部は又た十二月下旬若くは一月にあらざれば、全く結氷
せず、西海岸のマウカ附近は、全島中極めて温暖なる地方にして、冬季と雖も
結氷せず、現に昨三十六年中は、遂に結氷せずして、春陽を迎へたりと、要す
るに有利の地は比較的温暖なる南サガレンにして、北部の偏陬に、至りては、
未だ人跡の到らざる所ありと。

▲人口 住民の種屬は、ギリヤーク人、トングリース人、オロチヨン人、ア
イノ人の四種にして、總計四萬を出でず。

ギリヤーク人	アレキサントルフスキー州	ソイモフスキー州	計
トングリース人	コルサコフスキー州	合	
	一〇四九人	七三三人	一八九九人
		五五人	一〇二

オロチヨシ人	二八一	四八九	七七〇
アイノ人	一一〇八	六〇	一一六八
合計	二〇四九	一三七三	三九三九

二百二十六

更に此他露人ありて之を別てば流刑殖民。流刑囚徒、流刑農民の三種となす事を得、之れ露國の政策なれど、却て自由民の移住を減ぜり。

▲交通 本島コルサコフと日本との交通季は、四月より十一月までにして、其他は結氷期に際すを以て自由ならず、大家商船會社専ら此の任に當り、小樽、函館、新潟、伏木、七尾、敦賀、酒井、濱田、佐渡、浦鹽、釜山、元山、を廻航して復た七尾（能登）に戻る。

船賃下等六圓五十錢
同 上等二十三圓
此他長崎より郵船會社の定期航海船出づ。

▲森林 植物は南方に多く、其種類は日本に同じけれど、寂寞の感あり、西部は落葉松、松、樅、檜、樺、白楊、黒莓等多く、南方には、櫻、林檎、コ

ク、樹、楓樹、柳、等あり、全島より見れば、四分の三は森林なれど、土人の不注意よりして屢々山火事を出し、其繁茂を妨ぐ。

▲農業 甚だ進歩に遅れ、僅かに小麦馬鈴薯類を産するに過ぎず、耕作地は、一人に付て一デジャテン位の割合なり、露人の言によれば、同島の農業發達せざるは、婦女子の少なきが故なりと、今日の計算によれば、男百に對し女四十の割合なり、産業の發達せざるも道理にして、若し他國より婦人の來るれば、年齢容姿の如何を問はず、求婚者群を爲すといふ。

裸麥	一	種	六、〇三六	種	二	種	三九、〇四六
大麥	種	三五、四一六	燕麥	種	鈴薯	種	二二、九五九
小麥	種	九二、四三二	馬鈴薯	種	薯	種	三九七、〇八〇

農産物として右に過ぎず、到底土人の食料となすに足らず、近年外國米を輸入すといふ。

▲牧畜 亦振はず、然しサガレンは適當の地なりといふ、千九百年の調査に依れば、一人に付き牛馬各一頭半の割合なりと。

二百二十七

種類は牛馬豚山羊綿羊の四種にして繁殖する事疑なし。

▲漁業

同島中最も價值あるは漁業なり、暴風雨の爲め、海岸に打ち上げらるゝ魚類のみにても、五六呎以上の魚の堤防を築くと、以て其如何に魚族の數多なるかを察するに餘りあらむ、又た河口には鮭鯡などの魚族群を爲し、舟楫を妨ぐといへば、本島の中央に住する住民の到底想像の及ばざるものあらむ。海藻の種類も亦た甚だ多く、南海岸一帯の地には牡蠣等の貝殻多し。

魚族は鮭鯡の外鮪鱈を多しとす。

陸上の狩獵にあつては、栗鼠、狐、黄貂、ゴルノスタイ、黄鼬、臘肭獸、狼、兔、熊等にして、其産額實に左の如し。

栗鼠（皮革となし）四百萬枚以上五百五十萬枚

狐 萬以上二萬枚

黄貂 三萬以上四萬枚

ゴルノスタイ 十萬以上二十萬枚

黄鼬 五萬以上六萬枚

臘肭獸

八萬以上二十萬枚

狼

三千以上四千枚

兔

百萬枚

熊

二千以上三千枚

歐洲婦人の襟巻に供せらるゝものは、同島産の獸皮を用ふるなりと。

▲鑛山

石炭は到る所に發見され、其最も大なる坑は、ヅエにして、毎年百

萬布を發掘すと、其炭質最も佳良にして、百分中七十四乃至八十四のカーボン

を含む、露國船又外國船にして、同島近海を航行するもの、皆同地の石炭を積

込むを便とす、然れども如何せん、船舶の碇泊困難なるが故に多くは日本より

積込む次第なり、されば西比利亞の事業家にして、同地の港灣を改築し、鐵道

を敷設せんと計畫をなしつゝあるものあり。

ヅエ炭坑に次でウラヂミール、マガチンスク、アレキサンドロフ等あり、各

々毎年の産額五十萬布以上八十萬布あり。

石炭に次くを石油とす、同島北方のナヒルスク灣附近よりオコツク海岸に多く、

千八百九十八年に発見したる、同湾東方のストロフ河附近にも産出あり。
 金は同島中部にあり、サガレン會社の手によりて發掘さる。
 琥珀はペーシエンス灣の東海岸に在り。

日本人小林伊三郎所有漁場		漁場	使用漁夫數	使用網數	收穫	高
全		桂久藏所有漁場	四九一全	九	九	九
ハツパス	ソイヤナイボ	アブマイ	ビタレン	オシモナイボ	計	計
一六、二五三	八、一〇三	六、一七〇	九	六、七〇	九	一、五、三〇八
計	計	計	計	計	計	計
一、五、三〇八	二、二	九	六、七〇	九	一、五、三〇八	一、五、三〇八

内山吉大所有漁場		漁場	使用漁夫數	使用網數	收穫	高
全		忠谷久五郎所有漁場	三五八全	二〇	二〇	二〇
ソヤ	ヤレケナイ	アカ	フヤ	ウヤ	ノヤ	ベヤ
七、四、五五	二、四、五五	二、〇、〇〇	八、五	一〇、七、七	一〇、七、七	一〇、七、七
計	計	計	計	計	計	計
一、八、六三	一、八、六三	一、八、六三	一、八、六三	一、八、六三	一、八、六三	一、八、六三

宮島館入所有漁場		漁場	使用漁夫數	使用網數	收穫	高
全		大内兵吉郎所有者漁場	二一〇	一四	一四	一四
ウツ	エケレン	計	計	計	計	計
六、四、九六	一、九、六六	六、四、九六	一、九、六六	六、四、九六	一、九、六六	六、四、九六
計	計	計	計	計	計	計
一、九、六六	六、四、九六	一、九、六六	六、四、九六	一、九、六六	六、四、九六	一、九、六六

菅野榮吉所有漁場		漁場	使用漁夫數	使用網數	收穫	高
全		品田鹿造所有漁場	一八五全	五	五	五
ヤンケ	オチヨボ	トモ	ナイ	計	計	計
一、八、三六	一、八、三六	一、八、三六	一、八、三六	一、八、三六	一、八、三六	一、八、三六
計	計	計	計	計	計	計
一、八、三六	一、八、三六	一、八、三六	一、八、三六	一、八、三六	一、八、三六	一、八、三六

全	山本巳之助所有漁場	モシラルシナイ	ケメシナイ	ウイホ	ナイホ	計	10,567
		二二〇全	四	魚油	筋子	鱈	20,000
		二二〇全	四	1,100	4,300	4,100	10,500
全	柳谷助市所有漁場	ナイエロ第廿五號	全	第廿六號	第廿七號	計	10,567
		七五全	三	鱈	魚油	2,360	
		七五全	三	8,100	2,500	3,100	
全	永野彌平所有漁場	ビシホニ	八五全	二	計	1,400	
		八五全	二	魚油	1,400		
		八五全	二	3,500	500	4,000	

全	米田六四郎所有漁場	チビサ	カマ	ド	ト	オ	ナ	リ
		一四三建網	六	魚油	筋子	鱈	2,100	2,100
		一四三建網	六	1,400	700	1,400	2,100	
全	岡田八十次所有漁場	無名第百十八號	モ	計	1,700	1,700		
		四五全	三	魚油	1,700			
		四五全	三	1,700	1,700			
全	四原林治郎所有漁場	サ	シ	ホ	計	6,700		
		九〇全	五	魚油	1,400			
		九〇全	五	1,400	1,400			

全	石川宇之松所有漁場	カ	ホ	ナ	コ	計	10,567							
		四	鱈	魚油	筋子	2,300								
		四	鱈	2,300	2,300									
全	村上祐兵所有漁場	タライカ	全	第廿四號	全	第廿五號	全	第廿六號	全	第廿七號	全	第廿八號	計	10,567
		七五建網	五	鱈	魚油	2,300								
		七五建網	五	1,300	2,300	3,600								
全	本田長右衛門所有漁場	カ	シ	ボ	ピ	計	10,567							
		五	鱈	魚油	筋子	2,300								
		五	鱈	2,300	2,300									

全	林寅吉所有漁場	コ	タ	チ	シ	計	10,567
		九五建網	四	魚油	1,400		
		九五建網	四	1,400	1,400		
全	若山政太郎所有漁場	ク	ハ	ア	モ	計	10,567
		六五建網	四	鱈	魚油	1,400	
		六五建網	四	1,400	1,400		
全	佐々木平次郎所有漁場	フ	モ	計	10,567		
		二	筋子	9,800			
		二	筋子	9,800			
全	ト	イ	ト	イ	ボ	計	10,567
		六	鱈	2,300			
		六	鱈	2,300			

ト ロ ボ ロ	六五建網	五魚油	三、五
		鮭筋子計	八三 九、五三
全 有田清五郎所有漁場			
タランコタン第廿號 ソーマナイオタシウス	四〇建網	二鮭鱒	五、三〇
		計	二、八七〇 四、八〇
全 小倉基所有漁場			
メレアスキモスト ナイオンナイ	五七建網	一魚油	六、〇三
		計	三、三八 一、二九四 七、五五
全 相原昇所有漁場			
アベラサニ ボロトマリ	五一建網	五鮭鱒	一、五八
		計	一、九〇七 七、二二

ヤンケンルレ		魚油	五〇
		鮭筋子計	四〇
全 岡田傳吉所有漁場			
無名第三十三號	三〇建網	二鮭鱒	一、七
		計	四、八一 三、三
全 小熊幸次郎所有漁場			
サフコタン イソウシナイ	三〇建網	二鮭鱒	八、三
		計	三、二四 四、〇
全 西村利光所有漁場			
ウ子トンナイ	二五建網	一鮭鱒	一、六〇
		計	二、八九 五、四

全 許勢甚七所有漁場	タ ラ イ カ	一五建網	一鮭鱒	一、四九
			計	一、五六
全 角野梅太郎所有漁場				
無名第卅四號		一五建網	一鮭鱒	一、四七
			計	一、五〇
合計				
漁場所有者數	漁場數	漁夫數	網數	收穫高
三〇人	九九	三、三三	引建網一、三	一、二四
			鮭筋	一、二四
			身欠鮭	一、一七
			鱒	三、二〇
			魚油	三、一七
			鱒	一、四六
			鮭	八五、八二

露人セメノフ商會所有漁場	ア テ ビ ト オ ト	マ ホ リ ト	テ ロ リ ト	シ リ ツ レ リ ホ	筋子 數ノ子	三、四三
	ケ リ ク ア マ ホ テ ア テ ビ ト オ ト	エ メ ラ ン	ツ モ ケ ト ロ リ ト	ナ イ マ カ マ リ イ イ カ リ ヤ イ シ リ ツ レ リ ホ	昆布	二、六
		計			合計	一、〇四、五七
					收穫高	一、〇四、五七

全 無名第一九二號	モ シ コ ナ イ ボ	全 パークリン所有漁場	ボ ロ ア ン ト マ リ 第 一 號	全 ブレチニヨブ所有漁場	ウ グ バ ー 第 一 二 七 號	全 スコソフ所有漁場	ピ シ ホ ナ イ ボ 第 二 號
計	鮭 魚 油 計	計	計	計	計	計	計
二六、七五	二、二六	二六、七五	二九、三九	二九、八六	三、四三	三〇、二三	二八、八四

全 ボロアントマリ第二號	全 ニカ子ンコ所有漁場	全 マ ト ク ス ナ イ	全 ブレズリン所有漁場	全 ウエソツワ所有漁場	全 セレブレニツキー所有漁場	全 ピシホナイボ第一號	全 無名第一四〇號(イ)
計	計	計	計	計	計	計	計
一、〇〇〇	一九、六六	七〇	一九、六六	二、二〇	二五、〇三	二五、〇三	三、三三

全 ホ ク ロ ン ケ ン	全 ウ ス ト マ ナ イ	全 ウ ス ト マ ナ イ	全 ニ シ ヨ シ ラ オ	全 コ モ シ ラ オ	全 シ マ リ オ	全 ト マ リ オ	全 オ ソ イ コ ン ト マ リ	全 チ ホ マ ナ イ	全 ナ ホ マ ナ イ	全 テ ル ベ ニ ヤ 灣	全 サ ウ イ ナ バ ー	全 ウ オ エ ウ オ ド ス カ ヤ バ ー	全 ア リ ヤ ト マ リ	全 モ テ ク ナ イ ボ
計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計
二〇、八〇	二〇、八〇	二〇、八〇	二〇、八〇	二〇、八〇	二〇、八〇	二〇、八〇	二〇、八〇	二〇、八〇	二〇、八〇	二〇、八〇	二〇、八〇	二〇、八〇	二〇、八〇	二〇、八〇

全 マ ヤ ー チ メ イ	全 グ ラ シ ナ イ	全 ス ラ シ ナ イ	全 ア リ ヤ ト マ リ	全 テ ル ベ ニ ヤ 灣	全 サ ウ イ ナ バ ー	全 ウ オ エ ウ オ ド ス カ ヤ バ ー	全 ア リ ヤ ト マ リ	全 モ テ ク ナ イ ボ
計	計	計	計	計	計	計	計	計
一〇、〇〇	一〇、〇〇	一〇、〇〇	一〇、〇〇	一〇、〇〇	一〇、〇〇	一〇、〇〇	一〇、〇〇	一〇、〇〇

全 ラリヨノフ所有漁場		ユガンキナレチカ ペールイ、カーメン 無名第百二十八號	鰹 魚油 計	一〇、九五六 二、五〇〇 四、六五八
全 コスケ所有漁場		ホ レ ド ケ シ	鰹 魚油 計	九、五七四 三、三三三 六、二四一
全 ノウイツキー所有漁場		身欠鰹 計	鰹 魚油 計	二、〇〇〇 九、三三三 一、三三三

全 パフンケ所有漁場		イ タ ク ス ナ イ	鰹 魚油 計	九、七三三 一、八 一、七三三
全 カルカボリツエフ所有漁場		エ レ ル ン コ マ ナ イ	鰹 魚油 計	一、七六六 三、四三三 五、二〇〇
全 サウエリーエフ所有漁場		カ ラ レ チ ン メ イ	鰹 魚油 計	四、九〇一 四、九〇一 九、八〇二
全 ベトルヒーレン所有漁場		ル ホ ン ト マ ク	鰹 魚油 計	四、八七〇 四、八七〇 九、七四〇

全 ボルゴフスキー所有漁場		無名第一五四號	鰹 魚油 計	三、二〇七 一、〇一六 四、三四三
全 フイヨードロフ所有漁場		オ ソ イ コ チ	鰹 魚油 計	三、一五三 一、五五五 一、五九八
全 ム子タフ子所有漁場		無名第六五號	鰹 魚油 計	一、一四四 一、七八〇 一、八九四
各沿岸土人及露人團體漁獲額		メ 箱	鰹 魚油 計	三三三 四六、八五五 一、一八八

漁場所有者數	漁場數	漁夫數	收獲高
二二八	七八ヶ所	三、二五一	九〇三、一六三
合計	合計	合計	合計
七、九三七	二六〇	七、九三七	五五、五八六

(備考) 露人名義の漁場中實際自身にて營業するものは、セメノフ、ピリチ、クラマレンコ、スコノフ及びブレチニヨフの五氏に過ぎずして、他

二百四十
は日本人に貸付く、最もセメノフ、ピリチ等と雖も、其三回の漁場を
除くの外は、大抵自分部下の日本人に貸付け居れり。

第四編 新發展地に興すべき事業

第一章 滿洲

▲農業 滿洲の土地之を省別すれば、黒龍江省約十九萬方哩、吉林省十一萬方哩、盛京省六萬方哩合計約三十六萬三千三百十方哩より成り、總面積九千四百六十萬町歩實に我日本總面積の一倍餘なりとは、酒匂農學博士の實地踏査に依る計算なり、而して同博士及びホシイの説によるも、九百四十萬町歩は既耕地にして、千七百萬の人口に耕され、残り三千八百町歩の未耕地は、將來移民者の爲めに、取除けられ居る遺利なりと曰へり。
便利よき盛京省丘陵起伏多く、吉林亦た山多く耕すに便ならず、獨り黒龍江省のみ、寒は寒なりと雖も、平原多く犁鋤を入れるに便に、其面積も遙かに他二省より大なり。

好個の此未耕地何を作るべきか如何なる耕作法を執るべきか。
▲大農制 滿洲從來の耕作法は、極めて單純にして牛馬驢馬を使用し、犁鋤

に牛馬二三頭を駕して、之を挽かしめ、農夫は後より其把柄を操り、深淺左右進退緩急其宜しきを得、又た土塊を粉碎するには、周圍三寸斗りの小木を撓めて、長さ四尺餘となし、之に牛馬を駕し、一度耕耘せし地上を挽く、終つて畦を作り、播種にも亦た牛馬を使用す、斯くの如くにして、少しも人力を用ひず、其牛馬を使用する有様實に巧妙なるものなり、清國人は中部南清に限らず、能く牛馬使用の法に熟練す、斯かれば、小農制の農耕法を取りては、到底清人に凌駕され之と拮抗する能はず、故に米國流の大農制を取る事を要す、然らざれば、資本勞力を投じ、却て利を收むるの少なる事あるべし、此點は特に研究する價値あり。

尙ほホシ一氏の調査に依れば、現在の滿洲農作法は、同一地に二三年間同一作物を栽培せり、斯くては數年の後に至り、其收穫減ずるに至るべし、今之を大農制にし、同一地面に對し、初年高粱を作り、次年蠶業三年目米大麥又は小麥、四年目に高黍とせば可なりといひり。

◎豆類 滿洲の野に生育成熟する作物の種類數量輸出高等は第三篇に述ぶる

如し、滿洲士民若くは定住者の常食として、栽培すべきものは、高粱黍何種なりとも可なり、然れども故國日本との關係を想ひたらんには、彼我の爲め豆類を作るを最も可なりとす。

日本は從來肥料として魚糞を使用せり、然るに此品高價にして而かも今後増加の見込なし、滿洲豆より製したる豆糞は、肥料として、之を補ふ事を得るのみならず、價格効用とも優に魚糞の上在り、之を磷肥と混用せば、其効能實に著しきものありて、現在日本人の施肥量を、豆糞に代ひ其數量を倍額にすれば、必ず收穫も今日の倍額となるべしと某農學者は語れり。

滿洲の大豆收穫高一段歩五斗を收む、而して日本に要する豆糞の量は、六十萬石の大豆を原料とせば、足れりといふ、滿洲の曠野に六十萬石の大豆栽培何かあらむ、輸入の後日本に効あり而かも一舉兩得の作物は豆類に如くなし。

◎蘆 昔し豐太閤其臣石田三成の功を賞して、祿壹萬石を増さんとす、三成辭し且乞ふて曰く、願くは殿下臣に賜ふに、淀川附近の蘆澤數里に亘るものを以てせよと、豐公其奇を愛て乞ふがまゝに之を與ふ、爾來三成沿岸の士民に令

し、蘆を以て種々の工産物を製する事を教ひ、大に殖産興業の途を講せりとか。満洲朝鮮の家屋構造必ず蘆より製する葦蓆を敷かざるを得ず、現に彼等は高粱の稈を以て葦を製し之を用ひり、日本人の手工業に巧なる、花葦は常に海外輸出品として歐米人にも珍重さる、今満洲の野に蘆を栽培し、蓆製造所を設置し、一は満韓人の需用に應じ、一は精巧緻密なるものを歐米に輸出せば、其益必ず三成の比にあらざるを疑はず。

聞く歐米人は、我日本製の花葦を、室の周圍に敷き詰むる爲め、種々の模様あるものを好むと、即ち室の中央に絨氈を敷き空虛あれば、必ず我華葦を敷くなり、其歐米に大顧客ある斯の如し、蘆は又た一種清酒たる葦を製し得べし、須らく本邦斯業者の考案を待つ。

◎麥類 満洲に麥類の生育せる事も既に述べたる如し、麥栽培の目的は常食となさんより寧ろ麥粉製造を爲すにあり、麥粉を以て有名なるは、世界中北米を以て第一とす、蓋しメリケン粉は、質の良好を云ふのみならず又色の純白なるを稱するのみならず、實に價の廉なるが故なり我埼玉縣の麥粉業の如き、中

に其質メリケン粉に優る事ありとするも、而かも我國の菓子、若くはパンの原料として、多く之を輸入する所以のものは、實に其價格の廉なるが爲なり、由來我邦の如きは、米を常食とし、パン、菓子の類は、寧ろ間食と稱するも可なるものにして、都會地の西洋料理に少量の食パンとなすの外は、悉く菓子の原料となすにあり、然るに三十六年の統計を見れば、七二、一〇四、七〇〇斤價格三、二七八、三二四圓の輸入あり、之に本邦産の供給を合すれば、麥粉需用高の頗る大なるを豫測し得べし、日本にして尙然り、世界麥を常食とする人種の麥粉を消費する事實に夥しと謂べし。

而して麥は粉となし食用に供するのみならず又た能く火酒を製すべし。満洲北部西比利地方は、寒帯に屬し、人民暖を取るに火酒を以てす、満洲にては、麥黍より火酒を製して、以て飲料となす事を知り、如何なる地方にても、民家に火酒のあらざるなし、西比利亞人に至つては、一層其然るを見る、加之牛莊よりジャンクを以て、中部南清等に輸出すといふ、一鉢に支那人は火酒を賞翫するもの、如し、去れば、ホシイ氏も、満洲の特産業として、焼酎製造を第一に

置きたり、其原料は麥類に如かざれば、満洲の麥類黍類の栽培は、單り自家の食料となすのみならず、輸出品の一なれば、之を改良し文明的組織となさば、其收益の増進する事も又一層ならん。

◎煙草 満洲煙草の劣等なる事は、嚮きに述べたる如しと雖も、邦人が満洲に於て煙草栽培を爲さざれば、唯一の原由あり何ぞや。

露人の煙草欠乏 露露に煙草の欠乏せる爲め、露人は從來之を土耳其に取れり、彼のロシア捲と稱する巻煙草の原料は、土耳其煙草と満洲黒龍江省の煙草なり、

喫煙家は其業に在らずとも、之を一喫すれば、忽ち其然るを知るを得べし。

案ずるに、露土戦争以來、土耳其は、此耻辱を雪かんとするも、適當の方法なく、偶々煙草問題あるを以て、満洲と共同露人に當り、せめてもの腹癒になさんとせしめ、満洲は露人の跋扈する所となり、其意を果たす能はずして、以て今日に至りしなり。

敏捷なる米國煙草トラスト 時機を見るに敏なる米國商人は、奇禍措くべしとなし、土耳其と結托し、露國煙草界を壟斷せんとせしが、先づ東洋に於ける煙

草を我手に入れ、然る後之を爲すも遅からず、且つや満洲は煙草の産地に非あらず、日本こそ東洋の煙草國なり、其一着手として、日本煙草を吸入せんと、彼の村井兄弟商會と結托し、茲に漸く其緒に就かんとして、明治三十六年日本政府は、刻煙草政府專賣法を發布し、三十七年三月の臨時議會に於て、帝國議會を通過したりしかば、米國煙草トラストは事の成就し難きを見て取り、清國に驥足を伸さんと、此度は香港上海を本據とし、大清國全部の煙草をトラスト一派にて壟斷せんと企てたりと、果して然らば、満洲煙草も其手に入る事、早晩疑なし。

我邦煙草を以て名あり、今や專賣法實施されたれば、耕作者以外の者は、茲に閑散の身となりしも同然なり、此際満洲に驥足を伸ばし、大に我國獨特の栽培法を施行せば、其收益も今日の比にあらず、而して露人は、何れにしても土耳其古か満洲の煙草を需用せざるを得ざるにあれば、獨り露人を相手となすも營業として充分なり、戦争に勝つも財政に敗るれば、何の益する處なし、斯くの如きは、鋒を以て得、算盤に平らぐと謂ふべく萬全の策に非る乎。

▲森林伐採及び營林

日本第一を以て誇る、秋田木曾と雖も、蓋し及ばざるべし、たゞ恐るゝは、運搬の不便なるにあれども、鴨綠江沿岸の森林は今日にても、土人等筏を組み川に下し、最寄集散地の市場に販賣するなれば、決して憂ふるに足らざるべし、其他の地方にありても漸次鐵道の開くるに従ひ、便宜を得べく、左なきだに、滿洲人の牛馬を使役するに妙を得たるや、能く一二人にして、六七頭の牛馬を使役し、重荷を運搬する事、さながら、陸上に於ける筏の如し。

森林營林を滿洲に奨励する他の理由は、斯る收益あるものなれば、必ず一の事業をして産を興すを得れば、無数の無頼人を驅つて、此森林事業に従事せしめ、良好の職業を興ふるに足る、且つや木炭製造を爲したるのみにては利便あり、此事は朝鮮に於ても然りとす、滿洲に於て、染房、火酒製造其他手工業に薪炭の必要なる當然なれば、此事必ず一の大事業とならむ。

▲鑛業 滿洲に於て最も大なる最も收益の大事業は、鑛山採掘となす、今順を追ふて採掘鑛物に付て記する所あらむ。

砂金 既に人の占有採掘するものは之を省くも、尙ほ幾多の砂金坑あるを知る。

黒龍江とガルクイーン河と會合する下流ハクキの上流北緯五十三度十八分東經百二十一度三十四分の地にバーホー金鑛あり、其面積廣袤百三十尺より長さ五里に渉り、平均四貫三百六十匁の砂中に七分四厘七毛を含有せる金鑛あり、此地一度清人の發掘せしものに係るも、千九年の騷亂より廢坑となり、何人の發掘にも係らず。

二、黒龍江畔グアンインシヤンの砂金なり、千八百九十四年中の試掘に七十二布の産額ありしと。

三、清國政府が秘密となしおく砂金あり、三姓より東南約二百三十露里、又ニングターより東北約二百三十露里に在るものなり、何故に秘密になせるやといふに、馬賊の奪ふ所となるを以て、時機を見て發掘せんと、今尙秘し居れりと。

四、サンツァーカウの附近ワンルンゴー河に沿ふて一の砂金鑛あり、現今廢坑たり。

五、三姓より百五十海里を隔てたる松花江の沿岸に一の砂金坑あり、何人の所

有にもあらず。

六、ムーターキャンの上流シキャンシ河口にも一の金鑛あり、之れも定まれる所
有主なし。

七、長白山の山脈にも金鑛あり、恐らくは滿洲中の最も利益あるものなりと、
然れども今はたゞニヶ所のみ發掘なれば、必ず他に莫大なものある事必せり。
八、花樹林子附近一帯も頗る多量の砂金あり、此地はニクスターの北、ムータ
ンキャンの溪谷中にあり。

砂金に付き特に注意すべきは、始め清國李鴻章等其大富源なるを知り、清國
の寶庫となさんと計畫したる事ありしも、中途にして露國の占領する處となり、
其採掘したる金を、悉く露國人の手に取り上げ、露人は之に一割五分乃至二割
の手數料を附し、再び清國に輸送す、是れ最も日本人の注目すべき事に屬する
を以て、ホシ一の説を假り茲に附記す。

以上は砂金のある事を知れるも何人も之を所有せざる坑、若くは踏査のみに
て未だ着手せざるものを擧げたるも、此他幾多の金鑛あるかは、實に吾人の豫

想外にして、頗る饒多なりと、若し夫れ黒龍口附近山中に既に採掘せるものに
至つては、能く人の知る處なるを以て省く。

石炭 銀銅も産すれど、先づ石炭を以て、有望なるものとせざるを得ず。

石炭は交通の便なくんば、良坑ありと雖も収入相償はず、黒龍江の北、ジャジ
ヤガン河の上流、ムータンキャンの沿岸吉林地方の石炭は、其質良好にして、
且つ舟楫の便あり、未だ何人の發掘にも係らず、一は鴨綠江に出すと一は黒龍
江を下りて、浦鹽斯德に輸るを得。

鐵鑛 遼陽地方鐵嶺地方に鐵鑛ありと雖も、既に人の發掘に係る、其何人の稼
行にも係らざるは、黒龍江海爾拉地方の鐵なり。

此他曹達は黒龍江の南部に、産し、其製造と同時に諸種の藥品鹽類を製し得べ
し。

斯くの如きは、到底清韓滿洲人の企及し能はざるものに係る、其此れあるは勿
論知るべしと雖も、化學的工業に關する技術は、到底彼等の腦裏になし、我邦
藥品は總て歐洲に仰ぐ、今此好個の天與に預る、須らく此に取るべし、價廉に

して、途近し、其利益ある事疑なし、恨みらくは、其詳細なる報道を爲し能はざるにあり。

▲石絨 防火防水用として、諸器械製造に欠くべからざる石絨は、滿洲南部

の地より、東部ハイヤン地方に産す、然して清人の採掘せしものは、悉く露人の手に供せらる。

由來我邦に石絨産出の場所少なきに、文明的器械製造の發達する今日、適當の採掘物なりと思惟す。

▲工業 滿洲の工業は即ち農業の別産物なり、油房染房豆餅製造及び麥粉製

造等の如し、今是等に依らずして、日本流に單獨に諸工業を開始せば、却て失敗を招くべし、文明的日用品及び其他の工業品は、先づ以て、商業的に輸入す

る方法を執ること可ならむ。今滿洲人を對手とし、直ちに開始するも、成效するの見込あるは、彼等の衣服の染方即ち彼等の染房なり、這是滿洲人獨特の嗜好にして、其原料たる綿布絹布は、我邦より輸入すと雖も、染方に付ては彼等

に一種の嗜好ありて、邦人の想像的推量染方にては、彼等決して満足せず、彼

等は白色の綿布を我より輸入しランチャンを以て己れの嗜好に應し、染工を施し、衣服となす、其狀況を知らん爲め調査したる我農商務省の報告全部を掲げ参考となす、如何に彼等の愛する染色の種々あるかを察すべし。

左の報告は明治三十五年中在牛莊の實業練習生より外務省通商局に報をしたるものなり。

滿洲に於ける染房の情况

當滿洲に於ける輸入綿布類の中色物、形附等なきにあらすと云へとも开は單に僅少の類に止まり其多くは織上生白の儘輸入せらるゝを以て其衣服料として使用せらるゝものは悉く其需用地に於て隨意染上若は形附せらるゝを常とす是れ畢竟輸入染布の色合模様等の清人の嗜好に適せざるに職由せすんはあるへからず若し夫其附染にして此地方に於けるものに比し美且廉なるを得ば盛に綿布の製造と共に宜しく彼等の嗜好せる色合及模様を講究し我發達せる化學的染法を施し以て附色又は形附けの上輸入するに至らば此間の利益蓋し鮮少にあらざるへし今此地に於ける染房の概況を示し當業者の参考に資せんとす

染房 染物屋の總稱にして大小二十五戸あり一家四十乃至七缸を有し四十乃至六人の職工を使役せり職工一日の賃錢は二十錢乃至五錢にして各業を分ちて執務せしむるの

法を取り午前七時より初め午前に至りて已む缸に灰、城、青、雑色の四種あり灰は正藍、魚白、銀灰等を、城は佛青、石藍、礪花等を、青は足青、干青、光青等を、雑色は洋藍、墨灰、靛灰、綠、紅、黃、紫等を染む而して其四種の中最も多くは灰缸にして城缸之に亞き雑色最も少なく總數十に對する灰四、城三、青二、雜一の割合なりと云ふ蓋し灰缸の多きは需用最も多き正藍、魚白等を染むるを以てなり

缸は直徑二尺深さ三尺五寸餘の甕にして粘土を巧みに其周圍を塗り固め側面下部より煖を取るの裝置をなせる等本邦從來のものに髣髴たり

灰缸は藍靛、石灰、邊城を用ひ一缸毎日洋布（幅二尺四寸長百〇四尺）三疋を染め終れば藍靛十五六斤邊城五六斤を投し棍棒にて攪拌し紫藍色の華をなすに至りて止め蓋を握き翌日に至りて更に之を使用す煖缸の温度は精確に知るを得ざるも約攝氏三十六七度ならんか

城缸は藍靛、臺城、水膠を用ひ一缸一日僅かに洋布一疋を染むるに過ぎず藍汁使用後は灰缸と同じく靛六、七斤臺城一斤餘を投し攪拌して藍華をなすに至りて止め隔日之を使用す温度は灰缸に比し稍高く約三十九度を過く青缸は二種の缸を有し一は綠礬の溶解液を盛り他は山茶葉の煎汁より成る缸の建て方は綠礬十二斤を取り之を一缸の水に二回に溶解せしめ缸に入れ使用と共に其効稀薄となるに従ひ適宜に投加して溶解す山茶葉は重さ約七十斤を二回に一缸の水を加へ煮沸して之を濾過し渣滓を去りて使用す一缸僅かに五疋を染め了れば溶汁復其用を爲さず之を棄て、更に溶液を作る

臺城は其形長方形をなし一塊の重量十二兩にして田庄臺附近に出つ百塊の價七十吊文乃至七十五吊文なりとす邊城は其形臺城に似て重く一塊五六斤に上り邊城外に産す百塊の相場過爐銀十六、七兩なりと云ふ（一斤は十六兩）藍靛は寛城子、買賢街に産するものを本場とし一斤の相場一吊二百文乃至一吊四百文即二十錢乃至二十三錢餘を唱へ綠礬は遼陽に産し水膠は奉天遼陽到る處に出つ山茶葉は安陽縣産出に係るものを一とし昨今の相場百斤に付四十三吊文即七圓十六錢餘を呼へり

染方 缸の種類により稍其趣を異にせるも概ね先づ染めんと欲する布疋類を集め木灰を投加したる温湯に浸し能く洗滌して糊及油分を脱し後各隨意の缸に繰り込み棍棒を以て絶えず混加し附色十分にして布疋の一端を摘み上げ一の木片に穿てる小竅に貫き強く牽いて繰り上げ藍汁を滴らしめ終りに之を水缸に移し入れ洗滌して後ち乾燥す

青缸は染色の落褪を防ぐ爲め悉く先づ灰缸にて正藍に染め上げ水洗乾燥の後ち之を綠礬の缸裡に繰り込み溶液の布疋に滲浸するを待て繰り上げ乾かして後更に之を山茶葉の液汁に浸し附色十二分にして掲げ再び水洗乾燥す

別に礪花と稱し所謂染抜の法あり隨意の型紙（油厚紙にして菊、梅、蘭、唐草、蝶、牡丹等の畫又は福祿壽の崩し字等あり）を取りて布疋に先て水化石灰豆腐及麥粉の三より成れる糝を以て其面を塗擦すれば糊は紙面の空虚を通して布面に附着するを見るべく之を全面に及ぼして後ち能く乾燥し全く糊の固着するを待ちて染め水洗乾燥して糊を掻き落せば其固着せし部分のみ白く染め抜かるゝものなりとす右の外染房にして

漂鍋を兼ね帯ふるものあり、漂鍋とは所謂洗滌漂白にして石灰、面碱（曹達に類す）を用ゐる水鍋中に投加して布疋類を入れ煮沸して揚げ能く洗滌して乾燥せしめ糊を引き之を敲き硬強なる而も光澤ある漂布を作す之を硬漂奇漂と云ふ

衆染局 此地の染房にて一の組合を組織し一定の規約を設けて各其制裁の下に業務を執れり

▲商業

満洲内地一般の商況は之を述べたり、此篇には、有望有益の商業として説示するにあれば、我邦との輸出入の關係將來如何なるものが、多く満洲に貿易さるゝやに止めん。

從來の貿易品其額 満洲との通商交易は、從來全く牛莊（營口を云ふ、營口を牛莊といふは歐洲一般の通語なれば暫く牛莊と記す）一港に過ぎず、牛莊も冬期結氷して、二三ヶ月間は交通甚だ不便なるに、凍氷なき大東溝安東奉天の今日まで開港されざるを以て、止むを得ず、此一港によりしのみ、故に牛莊との通商は即ち満洲全部の貿易と知るべし。

満洲即ち牛莊より輸出する品名價格左の如し。

豆	槽	五、〇二二、一一四	三十四年	明治卅五年	三十四年
大豆其他の豆類	二、二四三、三六〇	二、一八三、二九九	三、一五五	三、一五五	三十四年
榨	一〇四、六二四	二、三、七〇〇	胡	子	一一九、五七六
			獸	骨	八七、九五四

此他は、米、生棉、苧麻、包蓆、線綿等なれども、牛莊より輸入するもの甚だ少額なるを以て畧す。

次に本邦より牛莊へ向け輸出したる重要品中又た其重なるものを擧ぐれば左表の如し。

注意當時の海關兩は、我が一圓三十錢一厘に當る先きとは異なる

綿	織	五〇八、七八〇	三十四年	明治卅五年	三十四年
マ	ツ	一四四、三二八	一六四、五八七	二四、二二三	一七七、三〇八
天	竺	五四、三三六	九、九〇三	一四、一三二	一〇、四四五
石	炭	七三四、三〇〇	四一六、四二八	二〇、三七七	五、八六二
シ	一	一五、〇七二	三〇〇	一三三、五五一	一五二、六五〇
				一九、六一四	一四、五二八
				時	草
				紙	鈕
				卷	布
				煙	布
				草	布

洋 服	洋 燈 附 屬 品	洋 磁 器	石 金	生 金	雲 手	綿 フ ラ ン ケ ッ ト
二、三、四一〇	二、八、五六〇	一、四、四二六	一、七、六一三	五、二、八九〇	二、八、〇〇〇	二、五、二〇〇
二、八、九七五	九、七、五五六	一、一、七二三	五、一、一五	三、五、〇四八	一、九、二〇〇	四、二、七八
綿 フ ラ ウ ネ ル	綿 市	綿 銅 縮	洋 傘	洋 鏡	洋 鏡	洋 鏡
二、九、八八六	一、二、〇二五	四、八、九一	三、〇、二二	一、四、四六六	五、〇、五一七	四、九、四六
九、三、九八	三、一、九一	一、五、二四	六、二、九一	一、五、五七	一、〇、五九三	二、三、六二五
二、四、五八	一、二、四、五八					

注意 (本表の普通の兩即ち我が一圓四十錢に當る)

▲將來有望の商品

近頃巷説傳ふる商談を聞くに、戦後滿洲への輸出品は斯の如くなるべしとして、陶磁器の廉物、賣藥、綿毛布類、懷爐及其灰、殺虫散等を擧ぐ、其理由とする所を開くに。

戦争の爲め滿洲人の什器は大抵破壊され、然らざるも、器具散亂して集拾すべからず、家什を調るは、戦後滿洲民の大急務なり、然るに之を支那より仰かんが、江西江蘇の陶器を滿洲に輸送するには、多額の輸出税を支拂はざるを得ずして、非常の高價のものとなり、需用を充たすに足らず、此際我が美濃の多治

見燒の如き廉物を、支那向となし輸出したらんには、戦後一時の輸出品たるのみならず、將來も必ず永久に輸出品となるべし。

清國一般に醫藥衛生の道を欠き、特に滿洲に於て然りとす、戦後多數の移住民あれば、必ずや健康を害するか、流行病の傳染するや必然なり、此際醫師を俄に派遣するの難き一目瞭然なり、然らば、賣藥により、一時の急を治するに至る、此際、感冒藥、眼病藥、健胃藥、下劑、治腸劑、治腸膏、頭痛膏、清涼劑を輸出せば、獨り利益を得るのみならず、幾萬の生靈を救助すべしと。

極暑尙ほ冷氣を含める滿洲の野は、冬氣の凜寒察するに餘りあり、從來滿洲人は毛皮を被ふるを例とせるも、袴を製するに適當の切地なきに窮せり、綿毛布を彼等使用せざるに非ず、始めより之れあるを知らざるもの多し、此際之を輸出して、彼等に其用法を知らしめば、將來の輸出品となすに於て、這個の如き好物産はあらざるべしと。

懷爐及び其灰は、防寒具として未だ彼等の知らざるもの、殺虫藥は滿洲の毒虫を殺す爲め、何れも刻下の必須品なれば、之を輸出するに如かずと。

如上の理由は大に其然るを認む、兎に角、戦後滿洲は、事情を一變し、人の嗜好にも自ら差異を來たし、日本風の感染する事も必然なり、志あるもの、傳聞を輕信せず、憶説を立てず、大に研究し將來の大計を誤らざるに勉むるを要す。金融機關 さて、商業盛に諸種の事業勃興せば、急先に必要を感ずるは、金融機關なり、強ち銀行と言はず、個人の力能く營むを得ば、古代の兩替商の如きにて可なり、否な或るものは説を爲して、必ず銀行に限るが如く論ずるも、開は事を迅速に運ぶ能はざるべし、銀行には諸般の設備をも要し、且つ滿洲人の事情をも察せざるべからざれば、滿洲人の金融機關としては、却て兩替商可なるべし、但し本邦人の機關となり、軍政の用途としては、責任ある銀行を設立するの必要、今既に之れあるべしと雖も、將來滿洲人を文明に導く、初級として兩替商の不可なきを一言すること然り。

第二章 朝鮮

▲養蠶

韓國の地味氣候兩つながら蠶桑に適し、馬山、木浦、群山附近地方

は殊に桑園を作るべく適當の地なり、桑葉に最も不適當なる、粘土質の地味なる釜山すら、相應に發育せりと、韓全土を擧げて、斯業に恰好せるを證するに足る、氣候もさながら我信州地に酷似せりとは、斯れに實驗せるもの、言なり。韓國蠶業の既往現在 三千年以前の古代に在つて既に我が日本に漢織吳織の織法を教へたる事ありし韓國、養蠶の法を知らざる謂れなし、史を按ずるに、應神天皇の朝歸化の秦民彼國にて行ふ蠶業の法を傳へしより、一層精しくなりたりとあり、(秦民とは支那の秦始皇帝三世孝武王の臣を謂ふ)、應神帝以前より、養蠶の業ありしに相違なきも、此時より進歩せむを謂ふ、されば清朝諸國は、我邦より斯業の精しき事、證するに餘りあり、然るに此地味氣候と此光輝ある歴史を有てる、韓の蠶業の萎靡せる事、不可思議に堪へざる程なり、是れ其施政宜しきを得ざるに依る、今其桑園の状態を見るに、十文字小葉の野生の桑樹を、其儘田野に抛擲して、嘗て手入したる事なく、されど此業は蠶兒に適せるといひば、之を培養し手入を爲し、飼育せば、またしも蠶兒生育上可なるべきも、之れさへ顧みず、魯桑業を以て蠶兒を飼育す、魯桑は三四眠の蠶兒には適

すべきも、一二眠に到底不適當なるに、十文字葉を顧みず、矢魯桑を以てするに至つては、蠶桑の智識も亦た知るべきのみ、其飼育方法も甚だ粗雑にして、給桑時間、給桑分量も一定せず、掃除等の手當も届かず、實に不規則極まりたり、蠶種も數十年改良したる事なく、從來のものを發蛾産卵せしむる事、幾十年間なるを知らず、かるが故に蠶兒は強壯なるも、成繭大小不同にして、我國の最下等品にだも及はず、壹斗の代壹圓二十錢に過ぎず、此一斗の繭より取る處の絲量五十五匁より六十匁内外なり、斯くの如くなれば、蠶室の構造、空氣の流通、温度の高低等の好配置を爲す能はずして、要するに幼稚なる事三四十年前の我邦の如し。

改良法其收支概算 先年朝鮮協會に於て調査したる、韓國内に於ける、個人的養蠶の收支豫算左の如し。

桑畑壹丁三反歩の見積

支 出
初 年 度

收 入

一金六百四拾圓也 桑畑植付諸費
壹株に付貳本植込、壹反歩三千六百本
宛、桑畦は四尺幅として植付の見込な
れば三反歩は畦畔に要す

内 譯

- 一金五百四拾圓也 桑苗三萬六千本
買入代 但し千本に付十六圓
- 一金參拾圓也 雇人給料諸費
- 一金拾圓也 公 租
- 一金六拾圓也 施肥料

初年ナシ

次 年 度
支 出

- 一金百圓也 桑苗手入諸費
- 内 譯
- 一金三十圓也 雇人給料其他

收 入
次年度モナシ

一金拾圓也 公租
一金六拾圓也 施肥料

參 年 度

支 出

一金百貳拾圓也 桑苗養蠶諸費

內 譯

一金五拾圓也 公租施肥

一金四拾圓也 初夏蠶雇人給料及諸費

一金參拾圓也 秋蠶雇人給料諸費

收 入

一金千三拾九圓也 桑苗及繭收入

內 譯

一金八百拾圓也 桑桑苗壹株に付四
本切、一丁歩に付七萬貳千本取り上げ、

內一萬八千本切捨て五萬四千本賣上
代 但し千本に付十五圓

一金百貳拾八圓也 初夏蠶繭取上げ、

一石に付三十二圓、絲目一升到付八圓

一金九拾六圓也 秋蠶三石取上げ、一
石に付三十二圓、絲目前同斷

一金五圓也 桑苗切り残り燃料又は製紙原料代

四 年 度

支 出

一金百八拾圓也 桑苗養蠶諸費

內 譯

一金八拾圓也 公租施肥料

一金六拾圓也 初夏雇人給料諸費

一金四拾圓也 秋蠶雇人給料諸費

收 入

一金二千三百十二圓也 桑苗繭收入

內 譯

一金千九百五拾圓也 桑苗一株に付
八本切、一丁歩に付拾四萬四千本、取上
げ、內一萬四千本切捨十三萬心上代、但
千本十五圓

一金二百八圓也 初夏蠶繭六石五斗
取上一石三十二圓、絲目前同斷

一金百四十四圓也 秋蠶繭四石五斗
取上一石三十二圓、絲目前同斷

一金拾圓也 桑苗切殘燃料又製紙原
料代

五 年 度

支 出

一金貳百三十圓也 桑苗養蠶諸費

收 入

一金二千八百六十三圓也 桑苗養蠶諸費

内 譯

- 一金百圓也 公租施肥料
- 一金八拾圓也 初夏蠶雇人給料其他
- 一金五拾圓也 秋蠶雇人給料其他

内 譯

- 一金二千四百圓也 桑苗壹株に付雇
- 十木切一丁歩に付十八萬本取上内二
- 萬本切拾十六萬本賣上代金、但千本に
- 付十五圓
- 一金二百五十六圓也 初夏蠶八石取
- 上げ一石三十二圓、絲目前同斷
- 一金百九十二圓也 秋蠶六石取上げ
- 一石三十二圓、絲目前同斷
- 一金拾五圓也 桑苗代残り燃料又製
- 紙原料代

六 年

支 出

- 一金二百九十圓也 桑苗養蠶諸費
- 丙 譯
- 一金百三十圓也 公租施肥料

度

收 入

- 一金三千二百六十四圓也 桑苗及繭
- 丙 譯
- 收入

- 一金百圓也 初夏蠶雇人給料諸費
- 一金六拾圓也 秋蠶雇人給料諸費

- 一金二千七百圓也 桑苗一株に付十二
- 本切一丁歩に付廿一萬六千本取上内
- 三萬六千本切拾十八萬本切上代
- 但千本十八圓
- 一金三百廿圓也 初夏蠶拾石取上壹
- 石三十二圓、絲目前同斷
- 一金二百廿四圓也 秋蠶繭七石取上
- 壹石三十二圓、絲目前同斷
- 一金二十圓也 桑苗代残り燃料又
- 製紙原料代

前表設計は、故意に春蠶を飼育せざる方法にして、嘗て我邦の養蠶幼稚なりし時代に於て、始て長野縣に施行し、大に効果を收め、今日の盛大を致したる實地經驗に基くものなりとか、今朝鮮の地味氣候、専ら信州に酷似せるよりして、誠に之を實施し適當のものとして認定したる斯道丹練者の豫測なり。

▲棉花栽培 產地 植物學上より研究するも、棉花栽培は土性選擇に困難する植物の一なりとか、韓國にても全羅道陰島羅州等に産するも、其他は餘り

に良棉を得ずといふ、然れども全羅道一帯の棉花は頗る良質なりと。

栽培法 棉花栽培も亦た農學上手數を要するもの、一にして、施肥播種耕地摘心剪枝除草間引等、農家の尤も苦心する所、若し此等の手數を省かば、棉花收納の量を減ずるのみならず、良好なる棉花を得る事難し、然るに韓農は、三月より四月初旬に耕地整理を爲し、種子に人糞を混じて播種し、後ちは殆ど天然に委するが如き幼稚なる法なり。

全羅道棉花に付て 貿易概覽の示す所によれば、韓國全羅道棉花は、頗る前途有望なるが如し、其要に曰く、全羅道は韓國中棉花の産地として名あり、而して其産出地の主なるものは、陰島其他全羅道の諸島嶼を最とし、本土にありては、羅舟郡亦た多少の産出あり、品質は纖維細長にして、純白なり、紡績絲の原料としては、最も適當なる事斯業者の認むる所なり、繰上げの結果は、實棉百斤に付棉花上等三十斤、並等三十五斤を得べしといふ。

本道は本品の産地なれども、從來其産出の一部は、忠清道各地に供給し、一部は白木棉に製織して、水陸より京城又は元山地方へ供給し、且つ其市價も比較

的高値を保てる爲めに、昨三十四年秋までは、輸出品として注目を惹きたる事なし、尤も木浦開港後在留商人中、試験的に輸出したる事ありと雖も、面白き結果を見ず、本品の輸出は到底見込なき姿となり居りしが、其年冬に至り、輸出の道開け、其十月より三十五年六月までに、約九十萬斤價格五萬三千余圓の輸出ありたり、何故に斯る新現象を見たる乎と云ふに、重なる原因は左の主因にあるが如し。

一、三十四年の棉花は稻作より豊作なりし事

一、然るに例年の需用地たる忠清道、稻作凶歉の爲め購買力を失ひ、全羅道の棉花は販路を失ひし事

一、加之稻作の不結果は、韓國到る處商業不振となり、白木棉の製織も不振なりし事

一、然るに木浦の韓錢相場は三十四年より三十五年に亘り六下落を來し、韓國貨物は輸出の便を得たる事

斯くして（供給過多にして内地需用減じたる事切に輸出の道を開きたるなり）

輸出の端緒を開くと同時に、本邦人の注意する所となり、韓國重要輸出品となれり、尙参考の爲め、初期輸出時代の相場等を序に記さば。

相場 最初韓國人の不馴れなるに乘じ買取たる相場は、百斤四圓三十錢、其後漸次騰昂して、五圓五十錢。

荷造 一個二百二十三十磅を疋包となす。

運賃其他 關稅運賃保險料、及び大阪までの發着地解賃其他一切を合して、

百斤に付き一圓六十錢故に原價百斤五圓なれば、大阪着六圓六十錢となる。

産額 統計の徵すべきものなき故判然する能はざるも、忠清道及び其他京城

附近にて、製織する木綿織物のみにて、二十八萬二千七百七十六圓に上るを

見れば、全羅道の棉花産出は頗る多額のものなり。

斯くの如き次第なれば、將來全羅道の棉花は、多大の望を屬し得べく、韓國よ

り棉花を輸入し、我邦にて紡績綿絲となし、再び韓國へ輸出する順序となし、

日韓貿易上に新生面を發する事疑なし、日露戰後特に注意すべきは韓國棉花な

らむ。

韓國棉花沿革 現況上に述ぶる如く、其栽培法の極て放任幼稚なる全羅道棉花

も、實は光輝ある歴史に發達したるなれど、惰民を以て成れる韓國の事とて、

中古より斯く衰微せしならむ、嘗て印度のゴバアー(棉の原名)なるもの支那

に傳はり、支那の古代に之を古貝(直譯)と稱し栽培したるを、元の時代即ち

韓國固と高麗と稱せし時、文某なるもの元に使し、其種子を得て之を植えたる

に、何等の方法手段を知らざりしを以て、一度枯槁し二三種殘留せるもの、後

に至り再び之を栽培し、爾後漸く一の物産となし、當時日本とも交易せし事あ

りといふ。(書經、通鑑、和漢三才繪圖等)

▲煙草 嗜好の程度 清韓人の煙りを愛喫する事、我邦人より一層甚しきも

のありて、人々の能く知る所なり、甚しきに至りては、煙草の魔醉に飽き足ら

で、阿片を用ひ、遂に腦神經の常作用を失はしむる程度に至らざれば已まず。

從來の煙草及び日本煙草との差 韓人の常に喫する煙草は、韓國古有の葉にし

て、忠清全羅平安黄海等に産するものなり、之を刻むにもあらず、手の掌にて

丸め、例の長煙管に込め煙をふかす、黄色にして丸形なる事、柿葉の大なる如

き形を爲し、脂多からざる丈、其味も我邦の如くならず、況や米國産に及ばざる事遠し、我邦の煙草は慶長年間、葡萄牙人長崎に來り、煙草の種子を同所櫻の馬場に播種せしを嚆矢とするも、支那朝鮮は恐らく印度より傳來せしならん、去らば其種類に於て既に異なれりといふべし、尤も煙草は固と熱帯地の植物にして、タバコは原語トバコなれば、葡人の我邦に持ち來りしものも、其元種は悉く熱帯地方の産なるやも知れず、動植物皆悉く氣候風土に化せらるゝ性のものなれば、敢て異種なりとも言ふ能はず。

韓煙の栽培 韓國産地は前記の四道尤も多し、其産額幾何なるや、統計の徴するものなきを以て知る能はず、栽培法は、我國の法と大同小異なるも、施肥手入等甚だ粗なるのみ、然れども乾燥法は全く異なりて、悉く葉を掻き隠乾となす、我邦の木枯法の如きは一も見る能はず、煙草の品質香味の分るゝ處は施肥と乾燥にあり、此點甚だ進歩せず、幾段の改良を要す。

輸入煙草 日本より輸入する製造の數も亦た尠からずと雖も、此は多くは在韓日本人の購買する所となり、韓人の購求するものは、一兩三錢のものに限る、而し

て彼のヒローロの如き米國産を朝鮮人は好て愛喫すといふ。

●牧畜 種類 牛馬豚羊家禽なれど、朝鮮の牧畜の主たるもの牛を以て第一

とす、到底日本の及ぶ所にあらず。

從來の輸出 露亞、日本に輸出す、其數年々二千五百頭に上る、我邦に來るものは、多く山陰山陽四國九州の勞働用、若くは種牛とす、釜山より來る、露亞に輸出するものは、咸鏡江原よりするも自ら二に分る、元山より浦鹽に行くものと、陸路豆滿江を経て、亞比利亞に行くものとあり、年額三萬頭、盛なりといふべし。

生牛營業の状況 生牛賣買業者は、徳原永興文川地方のものにして、各地方の生牛市場（我邦の馬市場の如し）に至り賣買す、其取引法は爲換を多しとするも、まゝ韓錢一圓銀貨を以て、現金取引を爲すものあり、夫れより元山城津を経て浦鹽に輸出し、又釜山を経て日本に輸る。

今元山より浦鹽に輸出する運賃其他の計算を得たれば左に掲ぐ。

元山より輸出

原價生牛一頭代

三十七圓

海關稅

(牝) 二圓五十錢

解船賃

五十錢

運賃

日本郵船會社船賃

八圓

其他の汽船賃

六圓五十錢

浦鹽解賃

三十錢

檢疫料

九十五錢

計四十九圓二十五錢

之を浦鹽に賣捌く時は、少なくとも六十圓前後とす、往々五十圓位のものもあり、其利益豫測し得べし。

飼育費 牛一頭に要する飼育費左の如し。

牝 一日分

韓錢四十文

牡

六十文

地稅 (元山)

百文

但し一日二食

然るに韓人は、牛疫凍死に付て注意を怠るが故に、折角の良牛も輸出途中にて斃死し、莫大なる損毛を生じ、爲めに破産したるものさへあり、本邦人若し彼地に牧畜を爲さんとせば、特に此點に注意すべきを要す。

牛骨牛皮の製造 單り生牛のまゝ輸出するに限らず、牛皮牛骨を製造し、皮革は諸工業用靴用として輸出し、肉は食料になり、骨は肥料を製すべく、方針を執りたらんには、其收益亦た生牛の比にあらず。

家豚 朝鮮にては、到る所婦人の内職として家豚を飼育す、之れ亦た浦港に輸出す、一頭の費用原價とも六圓餘に過ぎずして、八圓より下らずして販賣するを得とすれば、却て生牛輸出より純益多大なるものあらむ。

▲木炭製造 鐵道枕木 韓國の森林中針葉樹の多くは赤松にして、他は潤葉

樹なり、赤松は鐵道枕木に適し潤葉樹は木炭製造に適す、概言すれば、韓國森林の産物は、枕木と木炭なりといふも過言にあらず、然るに従來韓國に鐵道なく、漸く京釜鐵道を以て始とす、其以前赤松を電信線用若くは家に用材となし

たるに過ぎざるも、家は我邦農家の納屋の如きものなれば多きを要せず、松林の鬱叢たるもの頗る多し、木炭も亦た鍛冶屋其他の手工業用に供するに過ぎざれば、森林伐採に餘裕ありといふべし、松は枕木とし我が栗よりも堅牢なりといふ、邦人の林業に志すもの須らく此二に注目すべし。

韓國山林所有制は三に分れ、公山私山無主山なり、公山とは公有にして、保安林なり、私山は私人の所有に係る、無主山は、讀て字の如く何人の所有にも、屬せざるものなれば、一應簡單の手續さへなせば、何人も伐採するを得る山林なり、韓國材木商中二三萬の資本を有するもの稀なりと聞けば、有志相集り森林業に従事せば、其益幾何なるかを知らるべし。

▲漁業 朝鮮沿海漁業は、已に業に邦人の知悉せる所にかゝり、頗る有利なるを以て、更に贅語を發するとを止め、一目瞭爲たる爲め、農商務の調査に成る、遠洋漁業韓海一覽表を掲げん。

出漁船籍府縣	場	船舶の種類	漁獲物	季節
大阪府船籍	釜山近海	日本形八艘	鯛 鰆 鱈 鱈	至自 十六 月 月 節

▲商業 (貿易) 日韓貿易の現況 韓國は今尙農業時代にあるなれば、我邦よりの輸出品は工業品に多く、彼より輸入するは農作物産重に米豆牛皮等二三の天與物に過ぎざる事先づ當業者の腦裏に置くを要す。

船名	船籍	種類	噸數	航路	時期
長崎	全羅	日本形	二七六	無	自八月
千代	釜山	日本形	二七六	休	自五月
愛知	釜山	日本形	二七六	輪	自五月
島根	釜山	日本形	二七六	輪	自五月
岡山	釜山	日本形	二七六	輪	自五月
廣島	釜山	日本形	二七六	輪	自五月
山口	釜山	日本形	二七六	輪	自五月
和歌山	釜山	日本形	二七六	輪	自五月
徳島	釜山	日本形	二七六	輪	自五月
香川	釜山	日本形	二七六	輪	自五月
愛媛	釜山	日本形	二七六	輪	自五月
福岡	釜山	日本形	二七六	輪	自五月
大分	釜山	日本形	二七六	輪	自五月
佐賀	釜山	日本形	二七六	輪	自五月
熊本	釜山	日本形	二七六	輪	自五月
鹿兒	釜山	日本形	二七六	輪	自五月
沖繩	釜山	日本形	二七六	輪	自五月

日韓貿易總額

三十五年 年度	一八、五二二、二二七
三十四年 年度	二二、四二四、八九七
三十三年 年度	一八、五七〇、七四四

二百七十八

其内容 (即ち純然たる日本製品と否らざるもの及び純然に韓國品と否らざるもの)

入 輸	出 輸		三十五年 年度	三十四年 年度	三十三年 年度
	外 國 品	内 國 品			
外 國 品	九、三四四、八五〇	一、二〇九、三三二	九、五二八、〇〇〇	一〇、四一〇、五六三	九、四二二、八二一
内 國 品	七、八六二、六六五	一六、九四九、四九二	一〇、〇三五、四九二	九六一、八九七	五二九、四五〇
					五〇、九五九
					八、七五四、八五八

日韓と韓國對外國との比較 (但し釜山仁川元山水浦他)

日 韓 對 外 國 貿易	三十五年 年度	三十四年 年度	三十三年 年度
韓國對外國貿易	一一、五六〇、六〇六	一六、九五六、〇二一	一三、五二五、三四七
日本對外國貿易	一八、一七六、九三三	二二、五〇四、九一五	二一、一六三、七一
	日本六割三分	日本七割二分	日本六割三分

以上の諸表に徴するに、韓國に於ける貿易は、日本との額を最も多しとす、然るに仁川の如きは、支那とも近邇し、近年清商騒々として、我を凌駕するの傾きあり、新に絹織物は全く清商一手たる如く、甲斐絹一種のみ我が製品を輸入す、本邦商人の忽諸に付すべからざる一事なり。

明治三十五年五萬圓以上の日韓貿易輸出品

品名	輸出額	輸入額
△生 金 市	四七五、五三三	二二五、一二七
△シヤンカ (金市の事)	七〇〇、四五二	一一一、八二四
△絹 織 物	二四一、一四四	一〇二、六四五
△絹 織 物	五三、三七三	一六七、九七八
△紡 績 物	九三四、三二五	一二七、三九八
銅 織 物	九三、〇六四	一三〇、七六二
石炭 ヲークス	一一九、一四二	一一〇、二五一
金 屬 製 品	一〇五、六二二	六一、七一〇
衣 類	一一二、〇三五	一、三五一、四一四
△吹 糖		
△砂 糖		
△紙 卷 煙		
△紙 器 草		
△燐 寸 械		
△燐 材		
鐵 道 材 料		
鐵 山 用 材		
鐵 道 材 料		

前表中△印を付したるは、多く韓人の消費するものを表はす、無印は在韓日本人外人及び韓人共に消費するもの日本酒の如きは全く在韓日本人の消費なり

明治三十五年五萬圓以上の輸入品

二百七十九

海米	九一、〇四八	小	八八、三一二
大豆	一、八九九、八〇九	牛	四三四、六三二
小豆	一、二〇〇、一六七	皮	
草		麥	

將來の日韓貿易 現在の状況を以て將來を測るに、輸出品中紡績絲綿織物煙草燐寸呎繩石炭等は盛衰なく輸出さるべし、併しながら韓國文運の進歩と、在韓本邦人の愈々増加するに従つては、輸出の上に變化を來すべし、現今より、精製品は逐年其額を減ずる、状態なれば、韓國文化の進歩に伴ひ、必ずや粗製品の輸出多きを見、又た現時の綿織物に代ふるに絹織物となり、奢侈品の輸出するに至るも遠きにあらざるべし。

韓國農工業の盛大なるに従ひ、呎繩石炭食鹽、諸器械の輸出を増すべく、在韓邦人の増加するに隨ひ、日本酒衣服の輸出多大なる等、今日より動かすべからざるの理あり。

要するに、韓人相手の商業と、在韓邦人相手の商業と、及び何人たるを問はず、事業を相手（例ば鐵道事業に賣捌く枕木軌道の如し）の商業との三に區別し、

韓國諸種の事業進歩と農商工の發達文化進運の程度を深く研究し、將來の貿易を企つること肝要なり。

輸入品に付ては、將來に於ても、米、大豆、小豆、大麥、海産物、牛皮牛骨等、重要な地位を占むならむ。

第三章 西比利亞

▲漁業 日本人直に着手し、速に成功し收益ある者は、沿海州に於る漁業とす。

魚族 鮭、鱒、鱒の三種を最も重なるものとす。

魚場 オリガ、ウラチミール、プラスチック、クヅチツオフ、ブリスン、最も注意すべきは最後の二ヶ所なりとす、中にオリガ、ウラチミール、プラスチックには鮭鱒多く、クツチツオフは鮭にして、ブリスンは鱒多し。

資本と利益 多年の經驗に依れる收支計算左表の如し。

支 出

一金九百拾圓也

鹽一千三百俵但一俵七十錢

網代

一仟三百圓也

一全二百圓也	漁船及其附屬品代
一全二百圓也	網及繩類代
一全三百圓也	白米六十俵但一俵五圓(時價により高値あり)
一全二百圓也	食料雜品
一全二十圓也	草鞋代
一全二百圓也	漁夫三十名給料但一人四十圓
一全千圓也	船員給料
一全四百圓也	通辨給料
一全千三百圓也	漁場代
一全千四百也	日本輸入關稅
合計六千九百三十圓也	
收	入
一金壹萬千貳百圓也	銜七百石(百石ヲ六千尾トス)但百石ニ付千六百圓
差引四千四百七十圓	利益

右の表中運賃なきは、皆な自己所有の船と見積りたればなり、而して亦た初年度の計算を爲したるなれば、器具の如き、敷年使用し得るものは、次年度の支出中より省く事を得て、利益は夫れ丈増す道理なり。

▲**鑛業** 西比利亞の眞の事業は金鑛採掘なり、露人の誇る如く、西比利亞の土層悉く金なりとはあらざるも、而かも其多き事滿洲の比にあらず、漁業の如き亦た金坑採掘に及ばざる遠し、而して露政府始め猥りに採掘するを禁じたるも、後改めて何人をも自由に採掘し得と命令せり、然るに、今日甚だしく採掘したるなく、漸く獨米人の計畫に成る一の採掘會社あるのみなるを見て、評言を下せば、事業上に何等かの大困難あるに相違なし、露人の強慾主義を以て英米の事業家を以てして、猶ほ今日の如き状態ならば、頗る怪しむに堪たりといふべし、蓋し其原因は露政府の苛税にもあらず、酷寒なる爲のみにもあらず、須らく踏査研究するの必要あれば、茲に其發達せざる原因を宿題となしおかん。

▲**牧畜** 第三に收益ある事業は牧畜なり、西比利亞に獸畜の生育する事、却つて滿洲より夥多なるは、第三篇に述べたる如し、這は大に理由の存するありて、然るなり、該地の如き極めて寒冷なる地に棲息する人は、食物より暖を取らざるを得ざると、土地の面積廣きが故に、幾百頭を飼ふも、之が狹隘を告ぐるなく、且つ麥類の作物あるを以て、飼料に欠乏せざると他の營業を爲すより

資本を要せざる等に原因せり。

第四章 樺太

▲漁業 同島唯一の寶庫は漁業なり、農産なきにあらずと雖も、資本を新に投じて營む程のものにはあらず、コルサコフスキーに石炭を産すれども、漸く廻航汽船の需用に應ずるに止まる、同島の事業は、全く漁業を措て他にあらず。魚族漁場資本 西比利亞沿海州の漁業と大同小異なるを以て茲に畧す、ただ沿海州より數量の多き事を注意す。

次に西比利亞と異なるは、海苔海藻の産ありて、之れを製造し、丁幾となす事を得る之れなり。

▲雜貨商 漁業盛なるに反して、最も必要なる雜貨に欠乏せるには、人々共に困難せり、戦後樺太の我に復歸せば雜貨を輸送すること、此上もなき急務にして、頗る利益ある商業となす、されど、小資本にては永續する能はず、何となれば、小資本を以て品物を買入れ、同島に到るとするも、早く既に函館に至

らずして、運賃其他の費用嵩み、之を同島に輸送し、品物を賣り上ぐる頃には、其人は破産の状況に在るべければなり、請取り難き理の如く聞ゆれど、要するに、小資本にては、商品の運轉自由ならず、貨錢利喰ひ等の爲め利益薄しといふにあらむ。

故に組合組織となし、事務を分擔し、秩序を立て、着手せば、必ず利益あるべし。

資本、さて其資本として要する金圓は、少なくとも二三萬の固定資本と、之を運轉する流動資本と合せて、四五萬の組合か、若くは、共同事業となさば可ならむ、強ちに會社組織とするに及はず。

浦鹽斯德及薩哈噠島に於ける事業は、其種類殆ど相似たるものにして、先づ第一に指を屈すべきは漁業なり、昨三十六年度に於るハバロフスク國財省發布の漁場區域表によれば、薩哈噠島の漁場數總計二百四十ヶ所あり、尤も此内東西沿岸を通して六十三ヶ所は不營業漁場なるを以て、現在營業に従事するものは百七十七ヶ所なり、今之を小別すれば左の如し。

テルベンヤ灣	露國人	同	漁場	二十九ヶ所
東海岸	露國人	同	同	四ヶ所
アンワ灣	露國人	同	同	八ヶ所
西海岸	露國人	同	同	二十ヶ所
	露國人	同	同	二十三ヶ所
	露國人	同	同	二十五ヶ所
	露國人	同	同	四十六ヶ所

此漁場中紅魚（鮭、鱒をいふ）の分三十三ヶ所にして、鱒の分五十一ヶ所、又紅魚、鱒兼業漁場は九十三所なり、又以て其一斑を知るべし、次は牧畜事業にして北部沿岸を除けば、薩哈噠島の地到處肥草多くして水清く、殊に西海岸のマウカ、東海岸のナイブチ、アンワ灣のムラウイヨフスキ村の如きは好個の牧場といふべし、次に望を屬すべきは獸皮毛の業なり、現に三十六年中薩哈噠島より輸出せられたる黒貂皮は七千枚に及び其直接森林に赴き買収せる小商人の販賣価格は一枚平均二十留にして、又他より轉賣せる大商人の販賣価格は平均二十五留なりといふ、更らに本年初立會に於ける相場を聞くに黒貂皮一枚貳十五圓、栗鼠貳十錢、水獺八九圓、狐五六圓、熊十圓乃至二十五圓なりし

と、石炭、石腦油、昇布採取等充分望あり、昆布は其品質上等ならざるも、其種類我が北海道東海岸の産に類似せるを以て清國山東省市場に於ける呼聲悪しからず、昨三十六年中清國への輸出高五萬八千八百布度（一布度は四貫三百六十匁なるを以て此輸出高貳十四萬六千四百二十八貫目）なりと聞く、倍又茲に注意し置くべきは、湯屋、西洋洗濯業、理髮店、及び紙巻烟草の紙捲きなり、元來同地方一般に入浴は一週二回位に止まり、潔癖ある本邦人は少なくとも隔日位に入浴せざれば何となく心地悪しく思ふと雖も、何分浴場少なくて常に不便を感じるを以て、此處に浴場を開始せば、必ず相當の利得あるべく、又西洋洗濯業も、現今我が在住婦人が内外人の依頼に餘儀なく、其用を辨じつゝある有様なれば其有望の業たるいふまでもなく、現に我在住婦人の内職として唯一の業たるは推して知るべし、理髮店の如き、是亦皆無の姿なるを以て在住者の不便を救ふ上よりいふも、最も必要にして開業の曉には相應の繁昌を見るは疑なからん、次に妻帯者の爲め婦人の内職として適當なる又其最も恰好にして有利の業は露西亞風紙巻烟草の捲き方に従ふにあり、夫の二百五十本入一箱の

ものは、二時間位にて優に捲き終り、十五錢より二十錢の賃金を受くるを得べきが故に、副食物位は此内職によりて夫を補助すること容易なりといふ、以上は永く同地方に在りし友人が、今回の時局に際して引上げ來りしを訪ふて聞き得し事實談なり。惟ふに鯨の鹽漬の如き、砂金、白金、銅、鐵、琥珀、地松香（黒琥珀の一種）水晶、セメント及び結晶山鹽の如き、未だ進歩開發せられざる、其隠れたる諸多の天産物は、戦後我が邦人の着手經營を翹望するならん。

第五篇 極東三陸に聚集する各國の物産

日本と、清韓露領亞細亞との貿易状態は、前篇に略述する所の如し、然るに此三陸に集中する商品、豈に獨り日本産に限らんや、世界各國より輸出する事、當然の事實なり、中に日本産との競争品もあるべく、日本に全く産せざる品物もあるべし、此れを之れ研究する、實業家の前も勉むべきことにして、戦争に譬ふれば、恰かも敵状偵察の如き乎。

故に左の如く類別して、讀者の参考に資せんとす。

(甲) 日本産との重なる競争品

- 米 茶 麻 漆 人参 綿絲 綿布 生絲 絹布 製造煙草 紙類 醸造品
- 砂糖 昆布 海參 食鹽 陶磁器 燐寸 石油 石炭 銅

(乙) 彼我競争なき商品

(イ) 日本の特用品

- 漆器 七寶 竹器 麥稈眞田 醬油 日本酒 密柑 寒天 木臘 樟腦

(ロ) 外國の特有品

藍 毛絲 毛織物 鐵 錫 時計 藥品 理化學電氣蒸汽機械器具 汽車汽船 軌道

大體以上の如く類別するも、其特有品と稱せらるゝも、必ずしも絶無といふに
あらず、競争し能はざる程度のもを一方の特有品としたるなり。
其特有品中、日本産のもの、及び競争品中にも、日本製出のものは、重複す
るを恐れ、之を省く事とせり。
本篇は、斥候兵の任務を帯べるものゆへ、産地品評統計を詳細に掲げんと、諸
書に涉獵し普ねく當局に質せしも、如何せん、清韓露西亞は、調査の不行届か、
精細なる数字を示す能はず、之れ最も遺憾とする所なり。
但し日本との輸出入の關係は、前數篇に於て遺漏なく掲述せりと惟ふ、

第一章 競争品

米

印度米 英領印度、ベンガル州、下緬甸、マドラス、中央印度、北西印度、ア
ツサム、オード、上縮甸、孟買、シンドパンジャ、錫蘭、アフガニスタン、
サマラン、輸出九千二十萬圓餘、二千萬噸餘。
支那米 漢口、長江沿岸南清各地方、年々三億萬石餘。
朝鮮米 朝鮮各道特に京城以南の地、年額千五百萬石餘。
伊太利産 地中海の沿岸、四千萬噸、内六百萬圓輸出。
西班牙産 四萬噸輸出。
合衆國産 カロリナ、ルイジアナ、テキサス、九萬餘噸の産出。
此他ジャバ、交趾支那、暹羅にも産す。

茶

印度紅茶 アツサム州、ノースウエス州、ベンゴール州、パンジャブ州
錫蘭紅茶、品質頗る佳なり、價亦た高し、中央部、西南部、ウバ縣、サバラカ
ムア縣の四を産地とす、一ヶ年平均の收穫我一反歩に付き、四十二貫目程な
り。

支那茶 紅茶、綠茶、粉茶、磚茶(紅綠あり)板茶の種類あり、磚茶は専ら露國に

輸出す、年々總輸出額三千萬圓以上あり。

漆液

支那漆 安徽湖南湖北浙江陝西廣東甘南貴州に産し。

人參 朝鮮を始祖とし、支那の盛京省吉林省直隸山西雲南安徽に産し、年々十

萬斤を産す、米國の北カロリナ、カナダ、等には野生人參あり、五萬ポント

の産額、悉く支那朝鮮に輸出す。

綿絲

印度絲 印度孟買綿絲會社の製造、支那へ輸出す、其額三十萬俵を下らず、(壹

俵四百磅入)

支那綿絲 上海蘇州の製造、最も後に發達したる綿絲國なり、近年三十萬俵の

製出あり。

英國綿絲米國綿絲の二は、世界中の綿絲國にして特に米の如きは、從來の錘數

のみにても、二千百萬以上ありて、我日本の倍額なるに、近年亦た百七十の

大工場増設ありしと云ふ。其産額知るべきのみ。

伯刺西爾綿絲 近來屢々として進歩せり、生産二十萬余弗、其品質は光澤あり

て柔軟、又た抵抗力あり、印度産に優り米綿に劣る。

埃及カイロウ府にも綿絲會社あり。

紙

清國産、印度産、韓國産、獨乙産、露國産等有名なり、内清韓二國の紙は、其

原料楮三極等にして、我邦と同一なり、其他所謂西洋紙と稱するもの、日本

は固有の製紙としては、清韓二國と競争し、印刷紙其他の洋紙は、西洋各國

と競争するの地位に立てり。

露の産出(壁紙文書用四千萬留餘

板紙二百萬留餘

獨逸七千餘萬噸

麻

亞麻 支那、佛、英、西、白、獨、和、澳、匈、等に産す、就中英の愛蘭士、

及び白耳義尤も品質佳なり。

滿洲亞麻は、松花江、遼河、鴨綠江、の沿岸に産し、内綿麻苞麻は遼東奉天、海隅麻は松花江、廠麻は、松花江吉林船廠に産するを以て此名あり、我一反歩より十貫乃至十四貫を得、産額一萬兩余あり、是等の亞麻を輸出する其方法費用左の如し。

人夫賃五仙より拾仙、端艇賃拾仙より貳拾仙
關稅百兩に付き五兩

運賃、八千斤乃至一萬斤滿載し二十五仙以上、之に加ふるに、十仙の人夫賃と五仙の科量賃を要す。

品質日本の野州産にかかざるも普通品と同じ。

大麻 支那、亞米利加、日本、露。

特に露麻は産額品質共に他國に冠絶し、西比利亞に栽培す。

昆布

露西亞昆布 板昆布多く日本の勁敵なり。

鰹

支那合衆國に産す、支那錫佳なり

海産 露の生産十一萬留、南洋群島、朝鮮。

玻璃 北米 白耳義。

燐寸 支那、印度、露、北米。

洋傘 英、埃、獨、佛、米。

食鹽 獨乙、支那、英、佛領印度。

麥粉 北米、加奈陀、濠洲。

更紗 英、露、佛。

綿布 英、米、和。

絹布 英、佛。

もすりん 佛、獨、瑞西。

りりやす 英、米、獨。

石炭 (一九〇一年の調査)

北米 英吉利

二六六、〇七八、六六八
二二二、六一四、九八一

日耳曼 塊

一五二、六二八、九三一
四〇、七四六、七〇四

佛	露	日	北	露	日	伊	伊	伊	日	加	日	印	太	太	伊	伊	日
關	西	亞	義	西	石	太	利	利	牙	耳	奈	太	太	太	太	太	伊
西	亞	油	米	米	米	利	利	利	太	太	太	太	太	太	太	太	伊
三三、三二五、三〇二	二二、二一三、四一〇	一六、一五六、〇三八	九、〇二七、三二五	七、七九〇、一一二	六三、二〇〇、七三〇	二、八九三、三三三	一、三二九、〇二一	九八三、七九九	五六八、六九〇	三一五、二八六	二二、五六六	一六、〇五九	五六三、〇九六	一六、五四八			
北	西	亞	墨	日	日	英	秘	加	日	英	日	亞	日	關	佛	佛	北
米	牙	哥	洲	利	本	太	露	太	曼	太	露	亞	印	度	西	西	米
二七、〇四七	五〇、七六七	四〇、六四〇	二九、〇九八	二九、三九三	二九、〇三四	二一、九五一	一七、七六六	八、一二八	六二〇	五七、七八六	三、七二七						
七〇、七六七	七〇、七六七	七〇、七六七	七〇、七六七	七〇、七六七	七〇、七六七	七〇、七六七	七〇、七六七	七〇、七六七	七〇、七六七	七〇、七六七	七〇、七六七	七〇、七六七	七〇、七六七	七〇、七六七	七〇、七六七	七〇、七六七	七〇、七六七

二百九十六

銅 (以下略)
(一九〇二年)

第二章 外國特有品

藍	砂	靴	せ	羅	毛	鉛	錫	鐵	葡	酒
糖	草	草	る	紗	絲	フランネル			萄	精
印度、獨、英、米、和、暹、比律賓	比律賓、蘭領印度、香港、獨逸、支那、澳大利、白耳義	米、濠洲	英、獨、佛	獨、英、白、佛、和蘭	英、佛、獨	獨、英、和	米、西、日耳曼、墨、濠、英、加奈太、伊、希	米、英、日耳曼、露、佛、埃、匈、白、瑞、西、伊、加奈太	佛、獨、米、西	米、獨、和

二百九十七

曹達	英	英佛獨
磷炭酸	英	英獨白
石炭酸	英	英獨白
磷肥	英	英領印度
農器	英	獨
汽罐汽機	英	獨
紡績機	英	獨
電線	英佛獨	獨
レール	英	獨

重要中の重要なるものは、以上の品種位なるべし、此中各國より直輸出とな
るものあり、清商の手を経るものありて、從て轉輸出入、再輸出入のもの多か
らん、勢ひ止むを得ず。
平和克復の後愈々滿韓露亞と交易を爲すに當り、特に日本商人の勁敵たるべき
ものは所謂清商なり、清商の團結力強さと、商業に熱心なると、及び忍耐力の

強きとは、到底日本人の企及し能はざる事前にも一言せし如し、彼等は獨り、
滿洲朝鮮に商權を握るのみならず、世界の到る所として在らざるなく、我が新
發展地として、最も望を屬する浦鹽さへ、今日既に日本商人より、多く商品を
取扱ふ事別表記載の如し。

品目	對手國	清國	日本	北米	獨逸	英國	其他
藥房類	清國	四七、二五五	一八、〇一一	二四、三三八	五七、九九八	一、九〇三	六、一四一
文具類	清國	一二、五八四	三四、〇四四	一、二九四	七、〇五一	七六九	一五二
繩索	清國	九、〇六三	五、七七七		一、七七三		九
棉花	清國	三、〇一一	五、九八四		五		三四
葡萄酒	清國	一、三四四	一、〇九九	一一〇	四、二七四		四九
日本酒	清國		三、八九九				二
小問物	清國	三、六五三	一、五三三		一、二八三		二
鐵器及金屬製品	清國	一二九、六二四	七五、九七二	四七五、六四三	一三七、二六五	二八、七六四	
食料	清國	一二二、六六四	六八、四三五	八、八五九	六、五七三	一、三九三	三、四二七
罐詰	清國	九、四五六	五、二五〇	三七二	一〇、五五	九三五	九四四
石油	清國	五八、七五〇	二七、五三一			二九七、五三八	
石炭	清國	三、四二〇	一、八七六、六六六			一、一二九	
諸織物	清國	一五五、〇四四	七、〇七七		四、二四三		二〇八

機	麥	家	石	米	鹽	果	陶	茶	鐵	建	雜
械	粉	具	驗			物	器	(紅、磚)	道	築	貨
類	類	類	類			野	器	磚	用	用	
類	類	類	類			菜	器	磚	材	材	
二四、九四六	一、三〇三、八七二	二四、〇九〇	六、三五九	三〇四、七五六	三〇、三五〇	四一、四〇三	一六、九六九	一三四、九四八	五二七、六三五	一九四	六九八
三八、六九六	二六一、六九四	五、六四九	一、九四三	二八一、六七七	四五、八五五	七〇、二二二	二九、二二二	二五、九五五	五九、五三七	一、六〇二	二九九、六〇三
三二、九七四	一、三五五、九七二	六九	二、五七四	八六、九三一	五六七	五八	五八	五四〇、九二八	八一、一三五	一四、九七九	
五二、三七六	一、五二三	六、二九一	二、五六八	三〇、三三一	七、〇七九	四、六四八	二、七三三	二、七三三	二、七三三	二、七三三	二、七三三
六一、一三	一、二四九	三九七									
六、三七六	三七一			一三二、八三六	二〇、五〇四	六一一	五、五四九	一、二五〇	四四一、八〇八	五四〇	一九、二八六

依之觀之、商品の競争は、我に粗製濫造さへなくば、西洋各地の商品と競争する事、敢て難きにあらずと雖も、清商が歐洲に米國に將た南洋に渡り、あらゆる商品を取扱ふ萬能力に至つては、實際驚かざるを得ざるものあり。極東の地に幾多の開港場を新に設け、世界各國の商品輻湊する事、今日より豫期し得べく、決して本篇に掲げたる數種に限らず、此れより數十倍の額に上る

べし、此時に當り、清商得意の團結力と金融機關を設備し、飛躍を爲す事當然なり、此際我が商人が、従前の如き緩慢なる方法にては、清商と輸贏を争ふ事能はざるや必せり。貿易の事固より其品種を、外國に輸出せば可なりとすべきに非ず、國産を輸出すると同時に之に依つて利を占め、國益を増進せしむる事に努むべきなり、然るに従前の如く、内國産すら清商の手に掛る如き方法にては、此目的を達するに困難なるべし。且つや通商の事は、外國品と雖も之を運轉し、幾分の利を得ると、清商の如くするを商家の常とす、我の産出に係るものさへ、外商に委ぬる如き方法にては、極東三陸に聚集する世界の物産を日本商人の手に依り、之を取扱ふ事、先づ以て困難なるべし、注意すべきは此事なり、當業者の猛省を促かす。(第一篇乙の部参照)

第六篇 清韓露西亞以外に發揮すべき輸出品

戰捷國に列國の威服する有様は、恰も個人が或る事業に成功し、社會人衆の信用を博し、人の私淑せん事を希ふ如く、爲す事として、成らざる事なし、之れ今の社會に於て、殊に然るものにして、戰捷後の日本は、必ず斯くの如くなるべし。

果して左なりとせんか、單り清韓露西亞に對つて、發展するのみならず、其以前我を侮り、小弱國を以て遇したる、歐米諸國に向つても、大に發展の餘地を啓くとを得べし蓋し這は天の戰捷國に與ふる賞典にして、戰捷直接の利益に非るも、亦た以て、利用し得べき底のものなり。

然らば此際如何なる目的を以て、如何なる手段により、滿韓以外の地に發展すべき乎、之れ頗る趣味ある問題なれば、實用的より、吾人は屹度研究せざるべからず、戰捷の餘威は、敗餘の弱國に對し、得べきも、直に移りて第三國にまで、及ぼす能はず、たゞ皇天の恩惠と皇國の御稜威に頼り、從來發揮せざる處

のものを、顯彰する事を得ば事足るべし、外人の未だ解せざる、日本獨特の眞粹を、一層より多く、歐米人の腦裏に認識せしむれば可なり。

平たく言へば、歐米人中未だ我國物産の、眞價を解せざるものありて、爲めに折角の寶を抱きながら、所謂持ち腐れとなれるものあり、是等埋れるものを世に出さんとの意に外ならず。

▲歐米人の誤解せるもの

聞くならく、歐米人は、我國の陶磁器七寶及び漆器を輸入するも、這玩弄日用品として、講求する者多しとか、若し信ならば、全く誤解せるなり、此等の品は、一面美術の觀念を以て迎ひざるべからず、器物器具に形を成すもの、一品一形悉く、數千年の苦心を重ねたる、産出物にあらずんばならず、彼等は我國に歴遊し、京都日光の風景を愛しなから、何に故に、同じき系統を經、同じき慘憺の結果に出てし、器物器具を看るの眼を具ひざるか、併しながら、強ち咎むべきにあらず、風土歴史を異にせる彼等、文晁の飛龍を見て、小學生徒の徒ら書きと同視せる眼中には、一見其妙を悟る能はざるべし、其眼光を開くは

却て邦人の務めならむ。
 支那朝鮮は、遠がに我が美術の母國だけありて、我の美術品を愛するの風あるのみならず、而かも之を輸入せり。
 今美術的輸出品の内、陶磁器漆器等に於ける、先年の統計を見るに。

陶磁器		漆器		象牙製品	
國別	九一三、三九六	總計	二、四六一、五四四	海峽殖民地	四一、六一一
北米合衆國	二四七、八八二	英吉利	一九一、四四〇	其他ナ略シ	八八九、〇七九
香港	二六二、六七八	支那	五一、四八五	總計	
英吉利	二二〇、四六四	支那	一〇二、四二一	英吉利	七七、八一七
朝鮮	二二〇、八七五	北亞米	五九、九六一	支那	一三、八五六
支那	八三、六五〇	佛蘭西	六九、三五九	香港	八、七七二
英領印度	六三、七七六	獨逸	九三、三二〇	北亞米	五六、一八二
獨逸	六四、二六〇	露西亞	九一、四三二	露西亞	一、〇二五
佛蘭西	四五、二三六	和蘭	五二、〇〇二	佛蘭西	三八、八五七
和蘭	五七、四四七	其他ナ略シ	三〇、五〇五	獨逸	六、六八七
其他ナ略シ		其他ナ略シ	一二、〇一五	乙	

七寶器		其他ナ略シ	
總計	二二三、八八六	北米	七一、〇七七
英吉利	三五、九二六	白耳義	八、一一〇
		香港	一四、五一六
		獨逸	四、八八三
		其他ナ略シ	一八三、五三七
		總計	一五、一四二

此統計に依りては、英米は、常に清韓より輸出多きも其實に至りては、岐阜縣製造の日用品多く、京都粟田焼九谷焼等、精巧の美術品の少なきは亦た以て、泰西人の東洋美術を解せざるに依る、象牙の金銀象眼、漆器七寶等に至つて、更に尠なきは、彌々東洋美術の眞髓を現はせばなり。
 此種に屬するものは、繪畫、彫塑、漆器、陶磁器、七寶、刺繡等なり。
 東西各々審美眼を異にすれば、希臘羅馬を凌駕する程の丹精を凝らし、九天の水簾をも欺むく、水彩畫をも、濃厚下卑なる大道油畫程にも見られず、之を啓發する頗る難事に屬するも、一の動機だにあらば、潮の流るゝ如き勢ともなり、彼等の腦裏に感染する敢て難きにあらざ、泰西の美術品も東洋の美術も、審美の要素を具へざれば美といふ能はざるものなれば、其美たる觀念に於て、異同なかるべし、其美に慣れしむること移して以て、嗜好の傾く所となすを得べし。

更に陶磁器漆器等、美術工藝品にして、日用品を兼ねたるものを、彼等に鼓吹するに易々たるものあり、泰西人嗜好の傾く所を研究し、之を美術品に應用せば可なり、聞く所によれば、歐洲は動物を好むと、果して然らんには、陶磁器漆器等の日用品に彼等の嗜好する繪畫を以てすれば可なり。抑も日本美術の由て來る所のもの深き縁因ありて、今日を致せるものにて、瑞西が希臘羅馬を繼受し、巍然として、世の風潮に感染せずと誇る、夫よりは幾層の光彩ある歴史を経たるものなり、固より印度支那の美術を繼受したる事は言ふまでもなしと雖も、幾千百年の久しき、全く日本化し、日本の精神を籠め、日本の風土に依つて、大成せらる、彫塑の如きも、印度佛像彫刻より一轉化したるに相違なきも、山城飛驒の名工に依り、善く我が神髓をして、小刀一挺の下に發揮せしむるなど、泰西人の夢想だにも及ばざる所なるべし。古昔交通不便の戦争にて在らば、一たび開戦するや、交戦國双方に彼我が工藝品互に往來し、面目を一新せし事、史の證する所にして、史家之を以て、戦争の效に數へ、阿典の陷落は、スバルタの文化となり、希臘の滅亡は、羅馬の新

美術を發生し、斯くして羅馬帝國亡ぶるや、歐洲全土思ひ／＼に、其遺物を輸入し、茲に西洋文物を敷植したるなり、東洋に在つては聊か趣を異にし、戦争に依り得たりと言はんより、平和の交通に依り、輸入せるもの多し、否な宗教の賜物と稱して可なり。方今世界交通自在なるの今日、戦争に依つて彼我が物産を交易する事稀なり、さるが故に、其餘を利用して、平和の手段により、我が彼に通ぜざるものを鼓吹するに如かずして、美術家の務とする所は、採長補短にありて、之を輸出入するは實業家の任なり、後の實業家たるもの、心して貿易の任に當らば邦家實業界の一異彩を放つべし。

▲眞の利用を知らざるもの

日本特有の製作工藝品にして、歐米人其利用を知らざる者あり、竹細工木炭、木臘、樟腦等の類之れなり、勿論之に代る品のあるありて、毫も不自由を感ずるが如き事は之れなからんも、器物器具は各々本來の職務あるものなれば、其本全の任務に使用すること、物の適當なる用法なれ、尤も木臘樟腦は、全く我

邦唯一の産出にして、他國に比類なき爲め、四五年以前より輸出高一定し、敢て増減なく、一手販賣の姿なるも、之れとて、満足を表し得ず、特に木臘の如きは、歐米に代用品ありと稱し、價格騰昂の際には、買控の掛引をなす事あり、商人の掛引上通常の事なりとは云へ、眞の利用を知らざるが故なり、木炭は由來歐米に一品も輸出したる事なし、彼れには、石炭コークス滿俺の如き、燃料品數多あれば、敢て我邦の木炭を輸入する必要も之れなきに由るべし、去りながら、鑛物は五年十年にして、成層を作る者にあらず、海の事業瀕繁なるに隨ひ、石炭は益々其國要を高むべし、而して亞細亞の中央部より米國の中央部には、幾多の雜木鬱叢として林を成せり、外人之を如何に使用するを知らずと雖も、之を木炭となし、個人用の製造燃料に供する、世界經濟上尤も努むべきの事なり、而して森林は石炭の如く、長年月を要せず、依然たる森林を作る事を得べし、從來清韓二國に僅少の白炭を輸出しあり、彼等は阿片製造、菓子製造、金銀鑄造、鍛冶職用に使用せる事、日本の如しといふ、更に竹材竹器に至りては、支那新嘉坡印度等に産せざるにはあらざれど、日本産を以て最も良材とす

特に多くは、温帶熱帶地方の需用多きものなれば、内には竹林の栽培に銳意力を竭し、外、世界の半以上を占むる、温帶熱帶地方に、輸出するを得ば、此の價格のみにも少なからずとせず。

以上は一二の例を取り、從來の輸出品すら、眞の利用を解せざる事を述べたるに過ぎざるも、其他吾人の未だ知らざる輸出品甚だ多かるべし、當業者意を用て、開拓の道を講ぜば、座ながら富を海外に漁る鮮少ならざるべし、聊か事業家の注意を促す事爾り。

▲南洋其他 歐米國殖民地の移住

日露戰爭局を結ばず、滿韓の野に馳駢せんとして、今より待ちに待ちつゝある事、豫想するに難からず、固より前篇章を重ねて述ぶる如く、新發展地の焦點は滿韓の野に在るべし、然れども之れ急に一方に偏するの嫌なきか、其他にも發展すべき地は、地球上到る所に在り。

嘗て濠洲に於て、黃人排斥（重に日本支那人）を唱へ、而かも條約法律にまで表れたる事あり、排斥されたる反面には、勢力ある事を示す所以にして、日本

人の移住者を、恐るべきものとしたるなり、世界到る所、斯くの如く勢力ある日本人が、滿韓の一方に偏在せんとするは、我より進んで、世界的和合を捨つるに等かるべし、滿韓經營を努むると同時に、又た他に向つても、大に力を伸ばすべし、夫に滿韓の地、やがては、我が領地と差別なきに至るべし、力を竭すは却て他に在り焉。

黄人種が排斥されたる所以、數あるべしと雖も、比較的低廉なる勞銀に依り事に従ふと、物を廉價に販賣すると、忍耐ある等に原因す、依て彼等は競争に失敗せるの餘、異教の徒異人種と伍するを耻づとの理由の下に、我を排斥したり、然るに此の理由も、却て歐人コイル氏の口より黄色人種遂に排斥すべきものにあらずと曰はしむるに至れり、コイル氏は人類學者にして、濠洲殖民地と黄人と題せる書を著はし、黄人排斥の理由なき事を辨白せり。

其論する所を聞くに、日本人は馬來人と韃靼人より成る種族なり、歐米人も固と馬來より来る、然らば即ち其祖先に於て同一なり、其の今日白哲人といひ、黄色人といふは、氣候風土の然らしむる所にして、元來の腦に於て毫も異なる

處なしとて、黄白二色に分れたる、氣候風土の感化を、實驗上より證明したり、氏の調査に依れば、現に同一の人にて、風土の異なる所に到らば、數年ならずして、色素に變化を來し、又た其性質も境遇に依りて影響を被るものなりとて、今日の歐米白哲人が、謂れなく黄人種を排斥するの非なるを説き、之れ他に大なる理由あつて然るに非るかと思はれたり、且つ特に日本人を歓迎し、日本の教育政治法律等の現在を列擧し、日本人は少なくも、歐米人の下風に立つものに非ずと賞讃して措かず。

氏の過賞甘じて受くべきに非ずと雖も、歐米を崇拜する時は、最早去れり、舶來品必ずしも優秀なるものに非ず何事も彼に拮抗すべしと雖も、如何にしても、歐米人に及ばざるもの一あり、富の程度之なり、此優劣實に甚しく我國の富は、歐洲の貧弱國と稱せらるゝ、土耳其以太利にも、及ばざるなり、富の程度低きが故に、爲す事あらんとして爲す能はず、海外移民の如きも、勞働者に多く、資本を以て事業を企つるもの甚だ少なし、之れ實に遺憾とする所なり、智識腕力は一步も譲る所なしと雖も、此點を増進せずんば、彼と馳驅するも優劣未だ

計るべからず、先づ我勢力範圍内なる滿韓の地に素養を作り、而る後他に大に力を伸ばすべしと云ふは、此れに源を汲みたる言にして、戦後の大發展は地球上の強國としての日本を發揮せざるべからず。

去りながら、憂ふる事を止めよ、異郷にも亦た樂園ありて、切りに我を歡迎す、南米アルゼンチン共和國及びブラジル、ウルグエイ國之れなり、此三國は、外人を悦び迎ひ、特に文明的頭腦を有するものを、厚く遇するが如し、此國は何事も外人の手によつて、事業を興さんとするの傾あり、嘗て外資に依り、鐵道を敷設し、軍艦を作り、其他農工業外人の施設を待つもの多し、故に土地と雖も無償にて外人に譲與し、外人の永く此土に足を留めん事を希ふ、されば、大陸の人も北米人も、此地に土着せんとし、公園を作り、墳墓を築き未來を樂む、若し此所に一度定住せば、郷關に復歸するの念起らず、又た一種のユートピヤならずや。

事情斯の如くなれば、商品も亦た外國より輸入し、之を便宜とす、眞に好箇の新發展地なり、乞ふ單り滿韓に偏する勿れ。

戰捷
國民實業
指針
終

明治三十七年十一月十八日印刷
明治三十七年十一月廿二日發行

國民實業指針與附
正價金五拾錢

著作者

澤村幸一郎
菊池量平

發行者

增田義一
東京市麴町區有樂町三丁目一番地

印刷者

佐久間衡治
東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

印刷所

株式會社 英舍
東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

東京市麴町區有樂町三丁目一番地

發兌元

(電話本局
五百十四番)

實業之日本社

大賣捌所

東京堂

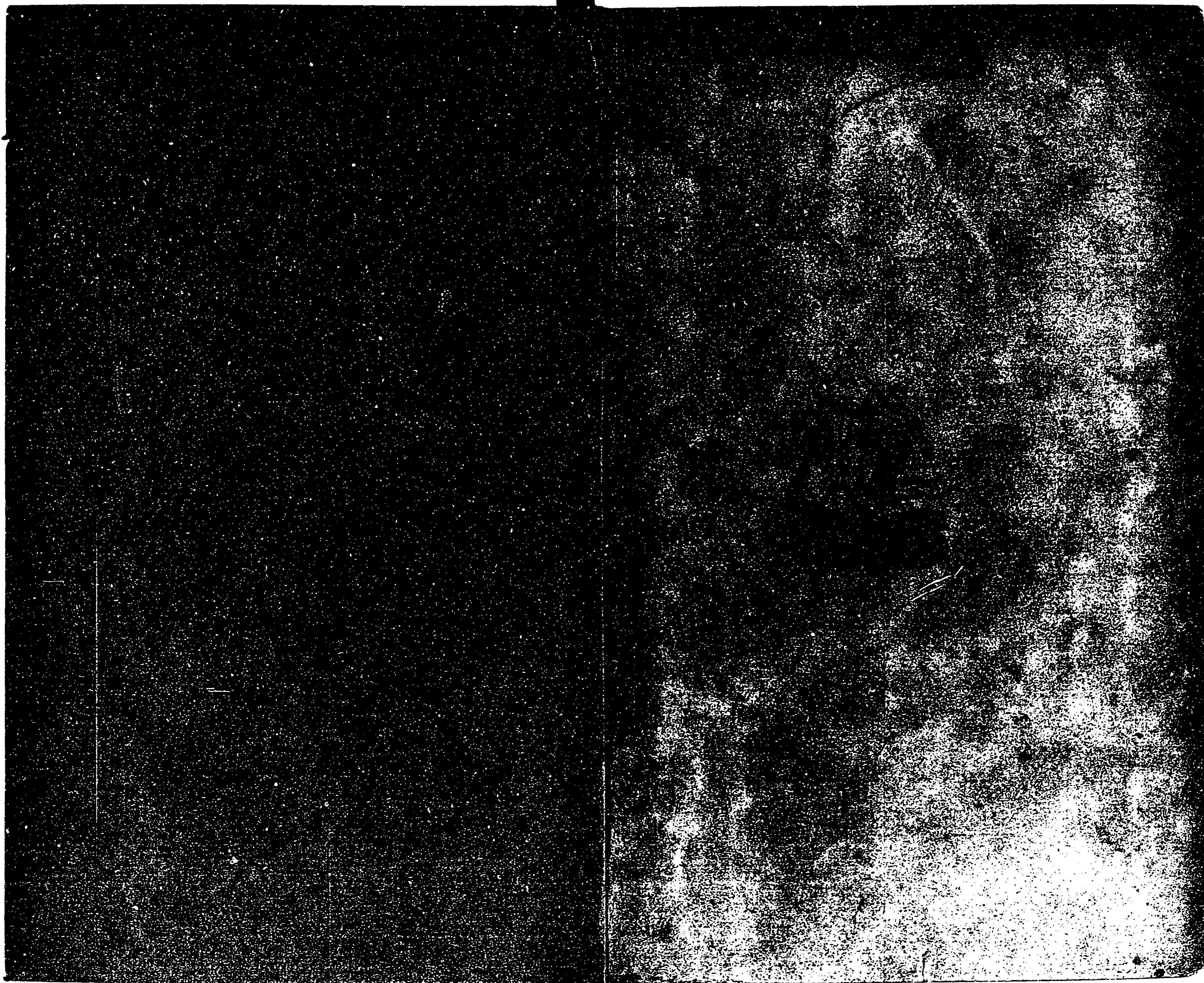
東海堂

北隆館

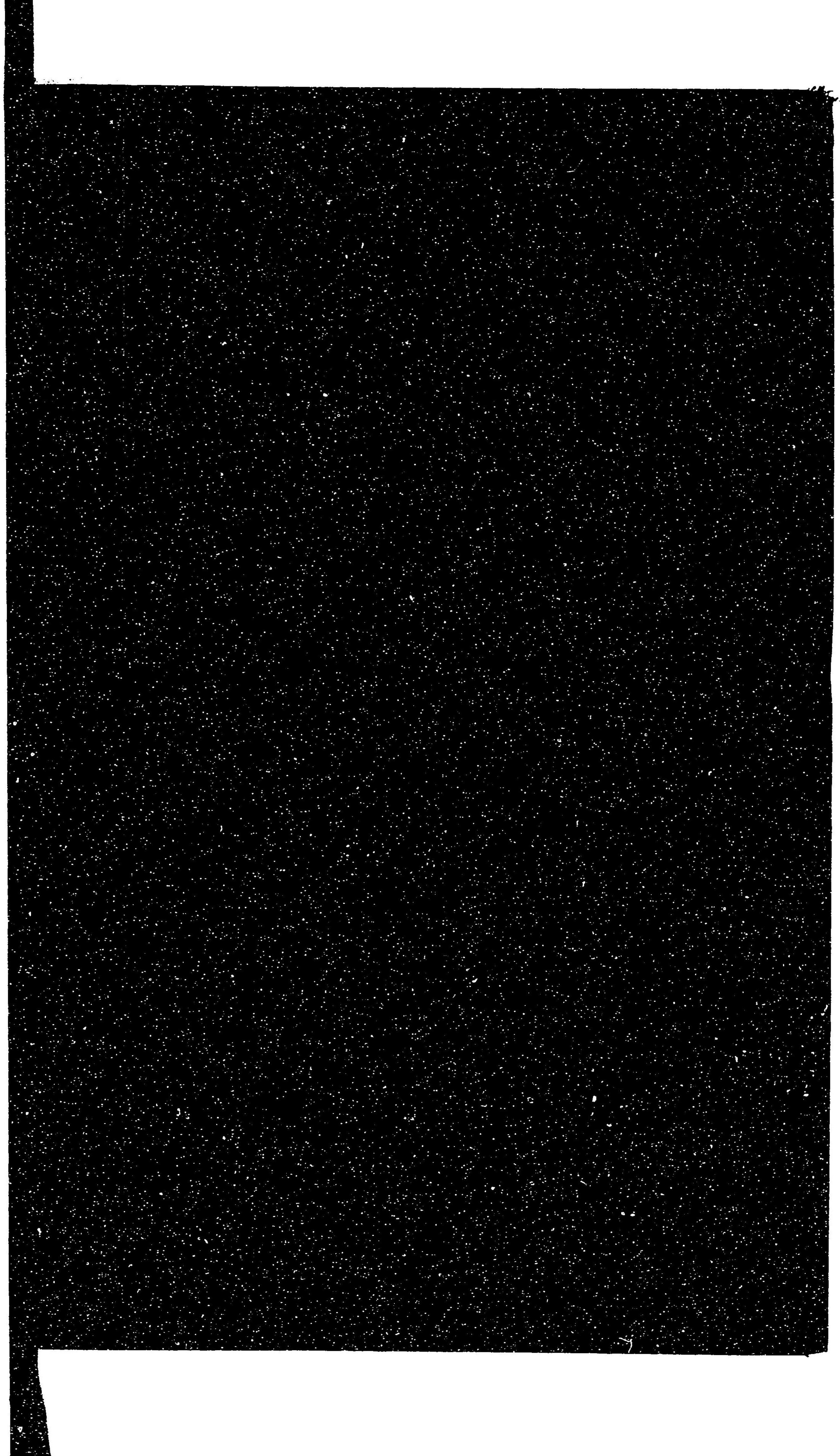
上田屋

良明堂

45
471



45
471



45
471

041860-000-3

45-471

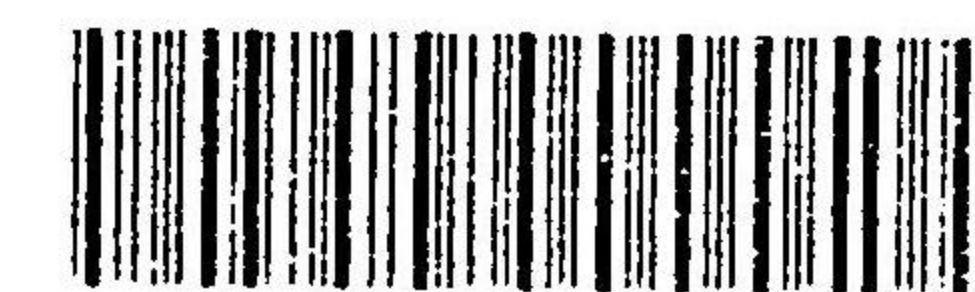
実業指針 (戦捷国民)

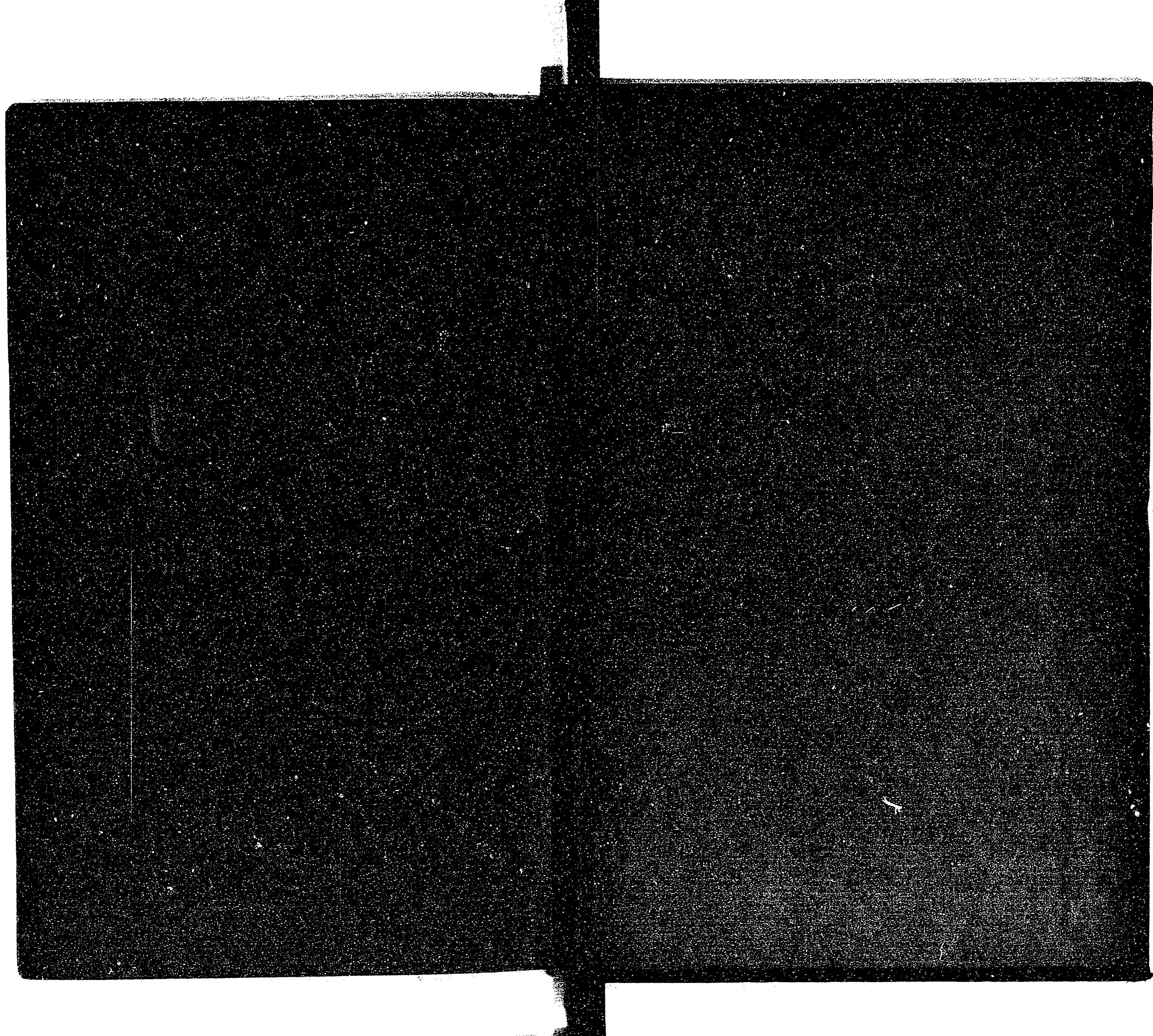
沢村 幸一郎

菊池 量平 / 著

M37

BDI-0496





48
1171

國
史
綱
目
全

東
京
堂
印